

〔資料紹介〕

故高乗勲氏旧蔵『草庵和歌集』

三 村 晃 功

凡 例

と傍注した。

3 底本の異本注記などはそのままとした。

4 便宜上各歌に一連番号を付した。

一、本稿は故高乗勲氏旧蔵（現国文学研究資料館蔵）の『草庵和歌集』を底本にして、忠実に翻刻したものである。

三、本書の解説については、拙稿「故高乗勲氏蔵『草庵和歌集』考」（『京都光華女子大学研究紀要』第三十九号、平成十三年十二月）を参照賜りたい。

二、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1 漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名等すべて

底本のままとした。ただし、漢字の字体は、おお

むね通行字体に従った。

2 底本の誤脱、誤字などもそのままとしたが、明

らかに底本の誤りと認められる場合に限り、（ママ）

四、初句索引は紙幅の関係で省略に従った。

五、本稿が成るに際しては、該本が国文学研究資料館に移管される前に、翻刻のご許可を賜った、故高乗

勲氏のご令息・高乗健氏に、深謝申し上げる。

〔翻刻〕

〔草庵和歌集〕（題簽なし）

草庵和歌集巻第一

春上

春たつ心を

1 朝かすみたなひきにけり敷嶋のたかまと山に春や
立らん

聖護院三品法親王家五十首に

2 あら玉の春たつけふの朝日かけにほへる山やかす
みなるらん

立春氷を

3 たえ／＼にこほりなかれて山川の岩こすなみもは
る立にけり

初春

4 相坂やし水なかるゝ音すなりこほりの関を春やこ
ゆらん

山霞

5 あつまちやはるのこえくる相坂の山はかすみの関
とこそみれ

初春鶯

6 うくひすもこそこのやとりのくれ竹の一よあくれば
春や知らん

和哥所三首、早春

7 みよしのゝ山下風は猶さえてかすみかくれに淡雪
そふる

等持院贈左大臣家六首に

8 晴やらぬ雪けなからにまきもくのひはらくもりて
たつ霞かな

日野大納言家三首に、早春霞

9 よなく／＼は雪けにさえて朝日かけいつれは空のか
すむ春かな

將軍家三首、雪中鶯

10 ふる雪のあしたの原に聞ゆなりはるをたとらぬう
くひすの声

おなし心を

11 はれやらぬ雪には春もしらしとやけさ鶯のなきて

つくらん

梶井二品法親王家にて、鶯

12 春はまつ句はぬはなにさそはれて猶ふる雪にうく

ひすそ鳴

谷鶯

13 氷よりうち出るなみを花とみて谷の戸さ、ぬ鶯そ

なく

鶯出谷

14 ひかりなき谷のふるすの鶯はいて、やよその春を

しるらん

故郷鶯

15 風さえて猶しら雪はふるさとのみかきか原にうく

ひすそなく

暁鶯

16 くれ竹のは山のかけのくらき夜に鳴うくひすのこ

ゑそ明ゆく

野鶯

17 朝なく、立出てきけは春の、のかすめるかたにう

くひすそなく

御子左大納言家旬十首に、鶯

18 あひにあひてのとけかりけりかけろふのもゆる春

日の鶯の声

日野大納言家三首に、鶯為友

19 竹をのみ友とおもひしわかいほになれてそきなく

うくひすの声

聖護院二品法親王家五十首、夕鶯

20 山もとのかすみかくれにきこゆなりねくらたつぬ

る鶯の声

沢若菜を

21 いまよりや雪けにまさる足引の山さは水にわかな

つむらん

22 わかなつむ雪まもなきをふる郷のみかさの野へに

さしてきぬらん

弾正尹親王家五十首に、若菜

23 若なつむ我衣手に風さえて空も雪まのみえぬのへ

かな

雪中若菜

24 うちむれてわかなつみにとこしものをまた雪ふか

し萩のやけ原

独吟百首に

25 かけろふのを、雪まをふみ分てあるかなきかの
若なをそつむ

寂真よませ侍し哥に、若菜

26 いくにかわかなつま、しかすみたつかすかの野
へもみ雪ふるなり

御子左大納言家四季百首に

27 あすは猶つもりもそする白雪のふるにつけてや若
なつま、し

関伽井宮三首に

28 春きてもまた霜かれの草の原誰にとひてかわかな
つま、し

弾正尹親王家五首に、春雪

29 梢をはつもらぬ春のあは雪もふるかはかり花と
見えつ、

残雪

30 朝なくかすみのうへにあらはれて山のはとをく
のこるしら雪

山残雪

31 わきてなとつれなかるらん出る日の光にちかきみ
ねのしら雪

法眼兼誉よませ侍し哥に、残雪

32 山たかみ空にかすみやへたつらん日かけの下に残
るしら雪

野残雪

33 春きても猶しら雪のけぬかうへにあまりてもゆる
をの、あさちふ

法印浄弁月次三首に、春雪

34 をのつからつもとみえしこのしたに分てつれな
く残るしら雪

御子左大納言家旬十首に、余寒

35 足引の山のみゆきのきえぬまはみやこの春もさゆ
る空かな

民部少輔大夫氏経家にて哥よみ侍しに、早春水

36 山川の水のしらなみよるくは又たちかへりこほ
るころかな

後光明照院前関白家にて、山霞

37 たかねには嵐吹こすほとみえてふもとにはれぬ朝
かすみ哉

春歌中

38 み雪ふる遠き山へも宮こよりみれはのとかにたつ
霞かな

39 はるのきるかすみをみれは足引の遠山すりのころ
も成けり

松原霞

40 みわの山ひはらかすゑの朝かすみかさしおりける
袖かとそみる

遠山霞

41 かすみたつうらよりをちのかゝみ山おもかけはか
りのこる春哉

夕霞

42 跡もなくやかてそかすむ夕日かけ入までみつるを
ちの山のは

曙霞

43 山のはも猶みえわかつてはるのよのあくる光は霞な
りけり

二条入道大納言家十首、霞
44 わたの原かきりもいとゝしらなみの跡なきかたに
立霞かな

海辺霞を

45 浪のうへは猶はれやらてなにはかたなきたるあさ
にたつ霞哉

46 なにはかたほのかにたてるみをつくしふかき霞の
しるしとそみる

建武二年内裏千首に、春天象

47 あさほらけかすみへたてゝたこのうらにうち出て
みれは山のはもなし

海霞といふことを

48 はりまかたいなみの海の興つなみちへにそかすむ
春の明ほの

左衛門佐入道和義朝臣すゝめ侍し法輪寺の百首に、

霞

49 木すゑまであらはれぬまで松かねに岩こすいその
かすむ春かな

弾正尹親王五十首哥に、霞

50 うら人のあしかり小舟かすむなりなきさこくとも

みえぬはかりに

御子左入道大納言家旬十首に

51 しかのうらや氷のあとに立なみもかすみて猶や遠
さかるらん

川辺霞

52 昨日かも氷とけしかみなせ河春をふかめて立かす
み哉

53 玉しきやいくせのよにかすむらん川上とをくは
るの明ほの

橋辺霞

54 いにしへのあともなからのはしくらたてるは春
のかすみなりけり

二月余寒

55 さほひめのころもきさらき名もしるく霞にさゆる
春の山かせ

和哥所三首に、梅

56 梅のはなさきそめしより朝なく空ふくかせも句
ふ比かな

民部卿家三十首に

57 玉はこのみち行人もあくかれてさとのかきねに
ほふ梅かえ

聖護院宮五十首に、里梅

58 いくさとのむめの句ひをうつすらん霞の袖のはる
の山かせ

梅薫風といふことを

59 梅かゝのなをいくさとかにほはましはるふくかせ
ののとけからすは

閑庭梅

60 うくひすの声より外はさそはるゝ人こそなけれや
との梅かえ

雪中梅

61 さきましる花かとそみるくれなゐのこそめの梅に
ふれる白雪

庭梅

62 わか袖にうつるもわきてしらぬまてむめさく宿の
にほふ比かな

御子左大納言家三首、梅薫袖

63 花よりも猶やにほはむ梅か、をこのもとことにう
つす袂は

同家四季百首に

64 吹かせのいかにさそへはむめのはな木すゑにつき
ぬ匂ひなるらん

前藤大納言家句会に、行路梅

65 過ゆけと袖をはなれぬ梅か、に猶このもと、おも
ひける哉

刑部少輔広房よませ侍し三首に、梅

66 をちこちの梢かすめるあけほのにいつくともなく
梅か、そする

古宅梅を

67 むめの花匂ふ軒はもあれはて、宿はさたかに残と
もなし

独吟百首に

68 久かたの月のかつらの空かけて梅か、匂ふよもの
はるかせ

民部卿家十首、夜梅

69 梅のはな匂ひや空にみちぬらん夜わたる月に春風

そふく

70 まきの戸をさ、てぬるよの手枕に梅か、なから月
そうつれる

朝梅

71 梅か、のうつるはかりになりはて、あくれは袖に
月ものこらす

等持院贈左大臣家五首哥に、梅

72 わか袖のひとつにほひになりにけりよものこすゑ
の梅の下風

前藤大納言家十首に、夕春雨

73 すかのねのなき日かけも春雨のふるをたよりに
くる、春哉

兵庫頭長秀もとにて、夜春雨を

74 霞たつけふの日かけはのとかにてくらせるよひに
春雨そふる

旅春雨

75 かすみつ、ふるともみえぬ春雨に中くぬる、旅
ころもかな

河春雨

76 晴やらぬ日かすへにけり春雨のをとなしかはも水
まさるまで

故郷春雨

77 たえく／＼に軒よりおつる玉水のたきの宮こに春雨
そふる

民部卿家百首に、雨中柳

78 いまよりはみとり色そふ青柳のいとよりかけて春
雨そふる

御子左大納言家四季百首に

79 青柳の花田のいとをそめかけてさほのかはらに今
やほすらん

前関白家にて、柳を

80 風ふけとみたれもはてす朝露のむすふはかりの青
柳のいと

二条入道大納言家三首に

81 吹みたす風のあとよりやかて又心とくくる青柳の
いと

後岡屋前関白家にて、柳風

82 青柳のなひくをみれはのとかなる春とてかせのふ

かぬまもなし

独吟百首に

83 影うつすいはかきふちの玉柳ふかくなりゆくはる
の色かな

弾正尹親王家五首に

84 一かたにおもひきためぬうき世とや秋こし鴈のま
たかへるらん

民部卿家百首に、深夜帰鴈

85 人しれぬたか別ちにならふらんあかつきまたてか
へるかりかね

帰鴈

86 いつはりのあるよになとかふる郷の契わすれす鴈
のゆくらん

87 かへる鴈たつを見すて、ゆくかたも猶こそかすめ
春の明ほの

88 かつみるも空こそかすめ別てはほとをへたてん春
のかりかね

霞中帰鴈

89 なかむれはかすみはて、はたえく／＼に又あらは

る、鴈の一つら

90 遠さかる声をしるへになかめすはかすみやはてん
鴈の一つら

二条入道大納言家花さかりに、東やまなる所
にて哥よまれ侍しに、帰鴈を

91 はなそめのあたる色にならひてや衣かりかねか
へりそめけん

をなし心を

92 花にうきをのか契も春のかりおもひつらねてねを
や鳴らん

93 別ては心もしらぬふる郷にたかまつとてか鴈のゆ
くらん

湖帰鴈

94 にほのうみやつりするあまの袖ならて浪にそ帰春
のかりかね

梶井二品法親王家三首に、海辺帰鴈

95 又もこむ秋もまとをに帰なり塩やくあまのころも
かりかね

独吟百首に

96 志賀のうらやかすむ浪まにかへるなり水にかすか

く鴈の一つら

水郷帰鴈

97 故郷をいそくならひのかりかねもよそにそかへる
志かのうらなみ

後岡屋前関白家にて、夜帰鴈

98 月かけのあたりをすくるほとはかりかすみもはて
ぬ鴈の一つら

民部卿家三首に

99 おもかけを又やしのはむ春のよの月にかすみて帰
るかりかね

夜帰鴈

100 山こゆるほともしられすかすむよのありあけの月
に帰る鴈かね

後岡屋前関白家にて、春月

101 月そ猶くもりもはてぬ山のは、あるかなきかとか
すむゆふへに

御子左大納言家三首、山春月

102 をはつせの山のはなからかすむなりふしみのくれ

に出る月かけ

前藤大納言旬会、春夕月

103 たちこめてくれぬる空の春の月かすむにつけて影
そみえ行

聖護院宮五十首に

104 かけはかりやとかる袖のなみたゆへ空行月のなと
かすむらん

春月

105 涙せくたかならはしにくもらんかすみの袖の春
のよの月

106 なみたにはかすむならひを春の月しらてや袖に影
やとすらん

入道前太政大臣家三首、春月

107 春の夜は月のかつらにさく花も雲とみえてや猶か
すむらん

双輪寺にすみ侍し比、二月十六日西行上人忌

日、前藤大納言人々さそひて三首哥講せられ
しに、春月

108 あけやすき夜はともみえす春の月霞をわたる影そ

のとけき

二条入道大納言家にて、水郷春月

109 かたしきの袖のなみたにみる月はかすむもしらし
うちの橋姫

民部卿家百首、河上春月

110 たか袖のうきならひよりかすむらんなみたの川の
春のよの月

聖護院法親王家にて、春月

111 よしさらはあけぬはかりに立こめて霞にのこれは
るのよの月

元亨の比、源大納言家詩哥合、春暁

112 あくるまのかすみにまかふ山のはをいて、夜ふか
き月の影哉

春暁月を

113 空に猶つれなくのこる月かけをかすみへたて、あ
くるよは哉

彈正尹親王家五首、春月幽

114 霞ともなか／＼いはし七そちのなみたのそての春
のよの月

御子左大納言家にて、故郷春月

115 かすむ夜はあれぬる軒のいたまよりもるともみえ
ぬ月もかけ哉

民部卿家にて、三月三日

116 春をへてみなかみ遠く成にけりなかれにうかふ花
のさかつき

曲水宴を

117 石まゆくはなのさかつきましてはしまたことの
は、かきもなかさす

御子左大納言家旬十首、梨花

118 木のもとと雪とふるまてとふ人もなくてやつゐに
山なしの花

鶯

119 この春もふるすたつねて山かつの宿をわすれぬつ
はくらめ哉

雲雀

120 霞たつ空にはそれとみえわかつてこゑのみあかる夕
ひはり哉

草庵和歌集第二

春哥下

小倉大納言す、められし北野社三首に、待花

121 春寒きみ山のさくらさきやらていまたにつらき風
の音哉

兼好す、め侍し浄光明三日に、をなし心を

122 山ふかくわくれはいと、風さえていつくもはなの
をそき春哉

等持院贈左大臣五首に、待山花

123 まちわふる花のさかりを今いくかあらはとつけよ
春の山もり

花哥中に

124 春ことにまちみしほとおもふにもいまはとたの
む花さかり哉

民部卿家百首に、雨中待花

125 をしなへてよものこのめの春雨にひとりつれなき
山さくら哉

御子左大納言家三首に、閑居待花

126 山さとはとふ人なくていたつらに花も日かけもを

そき春かな

民部卿十首に、初花

127 一木まつさきそむるよりなへてよの人の心そはな
になりゆく

兵庫頭長秀哥よみ侍しに、初花

128 さきにけり昨日は枝にこもりえのはつせのさくら
雲とみるまで

前藤大納言法性寺花下にて講せられし花十首に

129 山たかみあまきるさくらさきにけり霞のうへにふ
れる白雪

130 花のかのさそふ山ちを分ゆけは八重たつ雲に春風
そふく

131 あふ人のなきにつけても山さくら家ちわするゝさ
かりしそしる

弾正尹親王家三首、花未遍

132 契をくやとはありともさきそむるはなの所をまつ
やたつねん

花哥中に

133 春ことにいはのかけみちふみなれて花にたとらぬ

みよしのゝおく

134 さくはなも人にしられてみわの山かすみゝほふ

みねの春風

135 にほひくるかせをたよりに白雲の跡なきかたの花
やたつねん

弾正親王家五十首に、花

136 霞たつ遠山さくらとをくともあすの春日になをや
たつねん

御子左大納言家四季百首に

137 さくらさく色もにほひもあらはれてあくると山に
春風そふく

法印長舜すゝめ侍し賀茂社六首

138 白雲にまかふとならは山さくらたえすたなひく色
にさかなむ

藤原宗基よませ侍し哥に、霞中花

139 雲にたにまかふはつらきみよしのゝ、たかねのさく
らなとかすむらん

入道太政大臣家にて、花

140 山さくら雲もひとつにさきしより匂ひはよものあ

らしなりけり

三宝院僧正清閑寺坊にて、題をさくり花百首

哥よみ侍しに、花匂

141
をはつせや雲もあらしもをしなへて花の色かにう
つるはる哉

関伽井宮に花十首に

142
山のはもうつもれはて、さく花は空もたなひく雲
かとそみる

143
花のかのかすみを分るはるかせに梢ももる、山さ
くらかな

144
春のよの明行ま、に山のはのかすみのおくそ花に
なりゆく

建武三年内裏千首、春地儀

145
さくらさくいつくはあれと春ことにたつねてそ入
みよしの、山

山路花を

146
わけきつる山はいくへもしられぬに花の香ふかく
そてそなり行

青蓮院入道二品親王家三首に、花盛開

147
かつちるもさらぬもあれとけふしこそなへてさく

らのさかりなりけれ

民部卿家山王講のついでに、遠尋花といふこ

とを

148
わけきつる遠山すりのかり衣ころもへにけるはな
のかけかな

故郷花

149
春をへてはなに人めののこらすは志かのふるさと
猶やあれなん

150
をのつから春のみ人もたつねきて花にそのこる志
かのふる道

暮山花

151
山たかみ夕ある雲のはるかせに入日もかほる花さ
かり哉

夕花

152
夕くれは花の外なるかねの音も匂ふはかりに山か
せそふく

東山にすみ侍しころ、前藤大納言花のさかり
にたつねをはしてかへらるゝとて

153 くれぬとてたちかへれとも山さくらはなに心はと
まりぬる哉

返し

154 木のもとにこよひはあかせと、めをく心はかりは
花もたのまし

夕花

155 家ちこそわすれもはてめ山さくらくる、もしらぬ
花のかけかな

見花日暮

156 くれなはとおもひしはなの木のもとにき、すてか
たきかねの音哉

侍従中納言和哥所寄人さそひて花みられし時、

夜思花

157 よるは猶わか身にそそふくる、まて梢にみつる花
のおもかけ

東山花十首に

158 さひしきは花にわする、やとなれとみせはやとの
み人そまたる、

159 つれもなくけふまで人のとはぬかなとしにまれな

る花のさかりを

160 さほひめのいかにをれはとさくらはな匂ひさへそ
ふ錦なるらん

湖辺花

161 みるま、にさ、なみたかくなりにつけり花さきぬら
しおきつしま山

河辺花

162 老てよにふるかはのへのさくら花又もあひみん春
そすくなき

源大納言家十首哥合に、折花

163 ことのはもをよふはかりの色ならはおらてや花を
人にかたらん

折花

164 家つとにおるかひもなくさくらはなかへる山ちに
春かせそふく

民部卿家一日百首に、折花

165 おりてこそわか名もた、めさくら花つらきあらし
にまかせてそみし

同心を

166 たおるとも人なとかめそくら花けふはかりとそ
さかりをもみる

花挿頭

167 さくら花かくるゝまてはなれともかさして老を
わすれぬる哉

兵庫頭長秀家にて、花哥よみ侍しに

168 いとゝ猶かしらの雪の色そへて花のかさしはおひ
もかくれす

花插花

169 み山ちはさなから花のかけなれとあかぬ心にかさ
してそ行

近衛前関白殿にて、寄花述懐

170 年をへて花にそめてし心こそ老の春にもかはらさ
りけり(ママ)

前関白殿にて、翫花

171 さのみなと花にそむらんいくよしもあらしわか身
の老の心を

清閑寺花百首に、禁中花

172 桜はなさきてやいとゝもゝしきのこゝねかさねは
(ママ)

雲井なるらん

文保二年御譲位後、民部卿内裏にひまなくさ
ふらひて、東山の花もみぬよし申されしつゐ
てに

173 こゝのへの雲井の花になれてたにみしをわすれぬ
山さくら哉

返し

174 吹かせのおさまれるよの花なれは猶ちりやらて君
をこそまて

右京権大夫光吉朝臣山庄花のさかりに、人々
哥よみ侍しに、雨中花

175 春雨にしほるゝ花の下露は雪よりおつるしつくと
そみる

関伽井宮にて、古溪花を

176 たちならふ花のさかりや谷かけにふりぬる松も人
にしられん

花山院大納言家、題をさくりて哥よみ侍しに、
月前花

177 白妙のたかねのさくらさきしよりかすみもやらぬ

月の影かな

源大納言家詩哥合、春曉

178 はつせ山おのへのかねのこゑの内に木すゑの花の色ぞ明ゆく

青蓮院入道二品親王家三首に、月前花

179 いろよりも花をそみつるこの春は月の比しもさくをまちえて

將軍家五首に、月照花

180 おほろなるかけともみえすさく花の梢にうつる春の夜の月

夜花

181 春のよの月は木のまをいてやらてまつ山のはの花そみえ行

蓮智^{宇都宮遠江入道}よませ侍し三首に、曉花

182 まち出る有明の月のかけなからあらはれそむる山さくら哉

おなし心を

183 春の夜そいと、みちかき山のはのあくるをいそく花のひかりに

花下送日

184 夕つくよかけみし花のこのもとに在明までのたひねをそする

御子左大納言家にて、花忘老

185 さらにたに身の老らくはしられぬをいと、わする、花さかりかな

前関白家にて、寄花述懷

186 いたつらにめてこし春をかそふれは花そいそちの老となりぬる

聖護院二品法親王家五十首、見花

187 おしからぬ身をいたつらにすてしより花を心にまかせてそみる

御子左大納言家四季百首に

188 さきてちる花の日かすのほとなきにとふへきかたのおほくも有哉

189 をのつからちるはいつれの梢ともしられぬ宿の花さかりかな

190 さきぬれはやかてかつちる山さくらいつをか花のさかりともみむ

山路花

191 山さくらちりなむのちの家ちさへ花にわすれてし
ほりたにせず

藤大納言家月次三首に、落花

192 さくら花いまやちるらむ山かせの空にふきまく嶺
の白雲

清閑寺花百首に、原花

193 山かせのさそふもしるくまきもくのひはらくもり
てちるさくらかな

民部卿家に、題をさくりて哥よまれしに、行
路落花

194 ちりぬれと花のみ雪のきえぬまは猶いてかての山
の下みち

関伽井宮にて、夕落花を

195 いと、猶くる、家ちもいそかれぬあすまで花の嵐
ふく比

源宗氏か家にて、河落花

196 よしの川たかねのさくらちりぬらしこほらぬ水に
つもるしら雪

御子左大納言家にて、風前花

197 にほふよりさそはれぬへき心とや嵐に花のしられ
そめけむ

青蓮院入道二品親王家にて、庭落花

198 うつろふはさくとみしまの花なれば庭のさかりも
ほとやなからん

源光政もとにて、落花

199 桜はな庭のさかりもほとなきをちりぬとけふや人
につけまし

侍従中納言花さかりたつねきたりて哥よまれ
しとき、惜花

200 心なきはなにもさらはなしはて、ちるをつらしと
うらみすも哉

夕落花

201 よしさらはくれたにはてね花さそふかせのつらさ
もみえぬはかりに

202 今は又花のかけともたのまれすくれなはなけの春
風ぞ吹

法性寺花十首に

203 都人まつとせしまに山さとのみちもなきまで花そ

ふりしく

落花

204 きえかての雪ともみえすさくら花つもれははらふ

庭の嵐に

青蓮院宮にまいりて花見侍し後、雨のふる日

慶蓮法印もとに申つかはし侍し

205 雨にこそしほれはつともさくら花庭の雪とやふり

つもるらん

宮御返し

206 とへかしなきえせぬ花の雪なれは跡もいとはぬ庭

のさかりを

御子左大納言家十首、落花

207 さそひ行かせのやとりもよそならてこのもとにの

みちるさくら哉

等持院贈左大臣家に哥よまれしに、花隨風

208 さそひ行あらしはかりやさくら花ちるを別とおも

はさるらん

清閑寺花百首に、花鏡

209 花もはやさかりすきてや行水のかゝみのかけの雪

とふるらん

関落花

210 相坂の関のし水もみえぬまで猶こかくれは花そふ

りしく

清閑寺花百首に、浜花

211 花さそふ山かせふけは故郷の志かのはま松なみも

こえけり

等持院贈左大臣家三首、池落花

212 ちるまゝに池の玉もはうつもれて花をそわくるに

ほのかよひち

独吟百首に

213 おもひしる人もなきよにさくら花何とあたる色

をみすらむ

法性寺花十首に

214 とまらぬもことはりなりやうき世にはさくへき花

の色とみえねは

215 春きてはのとけきかせとおもひしをうつろふ花に

かこちつる哉

216 日にそへてしける青葉にいと、猶ちりぬとみゆる
山さくら哉

217 大宰権帥俊実家に、花哥よみ侍しに
残ともみえぬあをはの梢よりいまもたえくちる
さくらかな

218 東山にすみ侍し比、民部卿花のさかりに尋き
たられし後、申をくられし

山さとの梢はいかゝなりぬらんみやこの花は春風
そふく

返し

219 やまさとはいとはれし庭もあとたえてちりしく花
に春風ぞ吹

さかにまかりて花み侍しに

220 ほかよりもちりこそやらねさくら花あらしは山の
なのみなりけり

御子左大納言家旬十首に、残花

221 散やらぬこの一もとの花なくはたゝいたつらに春
やのこらん

をそさくらを見て

222 ちりはてし跡をたにとてたつねすはをくれてさけ
る花をみましや

223 聖護院入道親王家三首に、山残花
なへて世にちりぬる比は山さくらまかはてのこる
雲かとそみる

暮春鶯

224 うくひすの声をもかせやさそふらん花ちるまゝに
まれになり行

御子左大納言家旬十首

225 むすふてに匂ひそうつる山ふきの花のかけみる井
ての玉水

冷泉大納言家にて、歎冬

226 よしの川きしの山ふきかけみえてまたくれはてぬ
水の春哉

和哥所にて、同心を

227 よしの河みなとやいつこ山ふきのかけこそ春のと
まりなりけれ

河歎冬

228 芳野川みるかけさへにくれにけりとまらぬ春の山

吹のはな

二条入道大納言家にて、歎冬

229 ゆくはるをせくかとそみる山吹の花のかけなくゐ
てのしからみ

聖護院五十首に、歎冬

230 さきにけり八十うちかはのなみまよりみゆるこし
まのやま吹の花

等持院贈左大臣家五首に

231 たかためにさきにほふらんさかりとて人もこしま
の山吹の花

法印定宗か坊にて哥よみ侍しに、歎冬

232 山吹の花のさかりをまちえてやゐてのさと人春を
しるらん

四季百首に

233 花までもいはぬ色こそあはれなれみをうち川の山
吹の花

大膳大夫頼康家にて、歎冬

234 八重よりも数やそふらん庭のおもにちりてかさな
る山吹の花

独吟百首に、藤

235 たかためにたおりてくへき人もなしいさみにゆか
むたこのうら藤

基任か家にて歌合し侍しに、水辺藤

236 たこのうらやみきはの藤のさきしより浪の花さへ
色にいてつゝ

池藤を

237 池水に梢のふちのかけみえて汀はかはるなみのい
ろかな

松上藤

238 あらしふくまつにさかすは藤の花老せぬなみのた
つとみてまし

暮春藤を

239 立かへるならひも春はなきものをなにそはさきて
藤なみの花

庵室の軒の藤をみて

240 むらさきの雲をもやかて待みはや軒はの藤の花の
さかりに

御子左大納言家旬十首に、躑躅

241 なく鳥のなみたの色のくれなるにふかくもそむる
岩つゝしかな

暮春

242 花もはやちりぬるのちはおしまれぬものとや春の
くれて行らん

等持院贈左大臣家にて、暮春月

243 はなもはや跡なき雲とちりはて、月のみはるにか
すむよはかな

応長比よみ侍し百首に、山家暮春

244 うつり行月日もしらぬ山さとは花をかきりに春そ
くれ行

暮春雨

245 おしめともけふをかきりの春雨に空もかすみの袖
やぬるらん

暮春

246 散はつる花のわかれをしのふまにいやはかなくも
くるゝはるかな

前藤大納言家月次三首、三月尽

247 けふのみとかすめるみねの夕つく日のこるともな

き春のかけ哉

民部卿家五十首に

248 けふといへはおしまぬかたもなかりけりくれてい
つくに春の行らん

草庵和歌集巻第三

夏

更衣

249 ぬきかふる袖の別もつらからしなれて心をはなに
そめすは

250 散ぬれとほとなくかふる花そめの袖をかたみと何
おもひけむ

御子左大納言家月次三首に、同心

251 行春のかたみとおもひし花そめの衣へすしてかへ
まくもおし

金蓮寺にて哥よみ侍しに、朝更衣

252 よしさらは春にをくるゝ花のかをけさたちかふる
袖にうつさん

更衣

253 ぬきかふるほとにや袖にうつりけむ花のかうすし

蟬の羽衣

都鄙更衣

254 みやこにもたちかふる日はみちのくのかとりをと

めをおもひこそやれ

民部卿家五首に、尋余花

255 さきぬやと今こそとはめ山さくら春はつれなくみ

えし梢を

余花を

256 さくまでの名にこそたてれをそさくらさかりはこ

れもほとなかりけり

和哥所月次三首、庭新樹

257 庭のおもは花のかけこそかはるとも月もらぬまで

しけらすもかな

御子左入道大納言家旬十首、卯花

258 卯花のさけるかきねは白雪のところをわきてふる

ほとそ見る

杜卯花を

259 うの花のさきそめしより神かきにやそうち人の袖

そ数そふ

御子左大納言家にて、里卯花

260 さらてたに月かとまかふ卯花を露もてみかく玉川

のさと

夜卯花

261 夏のよのおほろ月夜もうの花のかきねにうつる影

そさやけき

御子左入道大納言家旬十首、牡丹

262 さきにけりなにそは色のふかみ草さらても人の花

になる世に

独吟百首に

263 何とた、かけてこふらんそのかみにまたもあふひ

のかさしならぬに

御子左入道大納言家旬十首、葵

264 春秋の名におふみ音イやのみや人もおなしあふひをか

さすけふ哉

夏哥中に

265 榊とるころにもなりぬかみ山の山ほと、きすはや

もなかなむ

等持院贈左大臣家三首に、暁時鳥

266 ほと、きすいつき、そめし初音よりね覺を時と待
ならふらん

住吉社哥合に

267 しのひねも猶そつれなき時鳥いつの人まを空にな
くらん

彈正親王家五十首、郭公

268 なれをしそつらしとはおもふ時鳥まつをならひに
としのへぬれは

聖護院二品親王家五首に、待郭公

269 もらすともうき名はた、し時鳥さのみなくねを何
しのふらん

おなし心を

270 まちわひてくらせるよひの時鳥きかぬかきりはね
んかたもなし

271 契をくはつねならねは中／＼にまたぬよもなき時
鳥かな

等持院贈左大臣家月次三首に、夜郭公

272 月よりも山のあなたやおしむらんふけてもいてぬ

時鳥かな

後岡屋前関白家にて、郭公未遍

273 いつくにかこよひなくらん時鳥月もさとわくむら
雲の空

前三河守高宗まかり侍し比、人々哥よみ侍し
に、待郭公

274 かくはかりあすしらぬ世に郭公いつをまてとてつ
れなかるらん

等持院贈左大臣家五首、待郭公

275 つれなさもなにしたつものを時鳥なくねのみとは何
しのふらん

三宝院僧正坊にて、郭公

276 一声にあくるならひはまたしらて待夜かすそふ時
鳥かな

民部卿家旬題百首、山家時鳥

277 このさとに猶つれなきはほと、きすなかくや山の
おくをいつらん

御子左大納言家旬十首に、人伝時鳥

278 ほと、きすまつにぬる夜もなきものをかたるはい

つのはつねなるらん

初郭公

279 時鳥それかとたとるしのひねはもらすもおしむほ

とそしらるゝ

同心を

280 ほとゝきすわかためもらすしのひねをきゝつとい

かゝ人にかたらん

彈正親王家三首に、郭公

281 さとことにみをしわけねはほとゝきすなけとつれ

なき名をや立らん

山さとにて時鳥を聞く

282 われも又みやまいてゝや時鳥まつはつこゑを人に

かたらん

民部卿家にて、夕時鳥

283 村雲の空になく也ほとゝきすこのゆふへとやしの

ひきつらん

藤原基任よませ侍し三首、夜時鳥

284 いくさとの夢のまくらを過ぬらんまたふかきよの

山ほとゝきす

前藤大納言家月次三首に、夜郭公

285 時鳥夢うつゝともわくへきを今一こゑのとをさか

りつゝ

民部卿家五首、夜時鳥

286 さよふけてそれかとはかり時鳥みやまなからの

つねをそ聞

花山院入道中納言家五首、暁時鳥

287 いつかたと聞たにわかつて過にけりね覺の空の山ほ

とゝきす

民部卿家にて、暁郭公

288 あまの戸をなきてやいつる時鳥あくる雲まに声そ

聞ゆる

初郭公

289 時鳥まつほとすきぬ日数とははつねの後そおもひ

しらるゝ

聖護院宮五十首に、遠時鳥

290 ほのかなるはつねは雲のいつくともしられぬ夜は

の時鳥かな

彈正宮三首に、暁時鳥

291 在明の月さしのほる山のはを、くれて出るほと、
きす哉

同心を

292 まつほと夜比はすきて時鳥おもひたえたるね覚
にそきく

293 かくてこそまれにもきかめほと、きす雲まの月の
明かたの声

294 山のはもまたみえわかぬよこ雲に声あらはる、ほ
と、きすかな

御子左大納言家旬十首に

295 ほのかなるた、一声も時鳥なをおもひての在明の
そら

東山にすみ侍し比、侍従中納言為明郭公を尋
にきたりて、聞てかへるとて

296 立かへりまたやたつねんほと、きすこよひ聞つる
声のならひに

返し

297 時鳥はつねの後もたつぬやといまのならひに人や
またれん

独吟百首に

298 あし引の山ほと、きす山にてもなをうき時とねを
やなくらん

299 よそにても今そき、つるかつらきや声もたかまの
山ほと、きす

杜時鳥

300 ほと、きすなみたかりてや衣手のもりの梢になき
わたるらん

夏歌中に

301 うき世にはたれをかなし心にて山ほと、きすこ
とかたるらん

湖辺時鳥

302 舟とむるひらのみなとにうきねして山ほと、きす
まくらにそ聞

303 にほの海にこき出てきけは時鳥やまもと遠く今そ
鳴なる

泊郭公

304 あまのすむさとなれにけり時鳥こよひうきねのま
くらにそきく

前藤大納言家にて、郭公遍

305 かたらはぬさところなけれ時鳥はつねのほとや人をわきけん

聖護院五十首に、早苗

306 ほと、きすなきにし日よりあしひきの山のをかへにさなへとる也

同心を

307 ときそとやさなへとるらん松のは、いつともわかぬ山のをかへに

入道太政大臣家三首、山田早苗

308 山人は家ちくれぬといそくまておなしをかへにさなへとる也

梶井宮にて題をさくりて哥合せられ侍しに、

早苗

309 外よりもまつおりたちてをかへなるわさたもしるくさなへとる也

夏哥中に

310 つくはねや山かきくもる五月雨のしつくのたるにさなへとる也

金蓮寺三首に

311 雨はる、さはたのさなへ水深みみきははかりにけふやとるらん

等持院贈左大臣家に、題をさくりて七十首哥

よまれしに、早苗

312 雨はれて夕日さすなりさなへとるたこのもすそやぬれてほすらん

御子左納言家句十首に

313 塩くまぬ袖さへぬれてみなとたのさなへとるなりあまのをとめこ

贈左大臣家三首に、採早苗

314 すみよしのみとしろ小田にしめはへて神のをとめこさなへとる也

同家にて、菖蒲を

315 おなしえのあやめの草を夏かりのあしやの軒にふきやそへまし

簷菖蒲

316 いにしへのかやか軒はのおもかけをかりふく宿のあやめにぞみる

水辺菖蒲

317 けふは猶かりふく軒のかけそひてあやめそしける

庭の池水

御子左大納言家にて、菖蒲

318 あやめふくけふやなか／＼古郷は草にやつれぬ宿

とみゆらん

同家旬十首に、同心を

319 あやめ草ひきけるぬまはしらねともこよひよと

の、枕にそゆふ

夜盧橘

320 ねやちかくはなたちはなのほふ夜は夢もうつ、

も昔なりけり

民部卿家三十首哥に

321 おもひ出るむかしもとをしたち花のはなちるかせ

のゆふくれの空

同家十首に、夏木

322 しのへとや花たちはなの匂ふらんわかこゝろにも

残るむかしを

独吟百首に

323 名のみして山はあさひのかけもみすやそうち川の

五月雨の比

長秀家にて、杣五月雨

324 五月雨に猶かはをとまたかしまのみをのそまやま

雲そかゝれる

前関白殿にて、五月雨

325 手にむすふ人こそなけれさみたれのしづくに、こ

る山の井の水

御子左大納言家三首に、滝五月雨

326 おちたきつ音そまちかき五月雨の雲にへたつる山

の滝つせ

金蓮寺にて、五月雨

327 猶ふかきふちとやならむみな川の川日かすもつもる

五月雨の比

贈左大臣家五首に

328 みな川の川なみもひとつにつくはねの雲そうきたつ

五月雨の比

前関白殿にて、河五月雨

329 わたるへきあさせもいまやさみたれに水まさり行

とこの山川

聖護院五十首に

330 ぬれつゝやそかのかはらの五月雨に水のみかさの
ますけかるらん

左大臣家三首に、湊五月雨

331 五月雨の日かすにまさるみつくきのをかのみなと
はさそさはくらん

駿河守行春もとにまかりて哥よみ侍しに、五

月雨

332 さみたれによとのつきはしたえしより隙なくわた
るまの、浦舟

彈正尹親王家五十首に

333 わきかへるをと聞えす五月雨のみかさにしつむ
せゝの岩かと

池五月雨

334 五月雨のまさるみかさにはそはれて庭に浪よる池
のうき草

御子左大納言家にて、浦五月雨

335 ますかゝみいまやみぬめのうらならんくもるもひ

さし五月雨の空

同心を

336 あま人のすてぬ小舟も朽ぬへしうらの入江の五月
の比

民部卿家に

337 五月雨にもとのみきはやかはるらん浪まになりぬ
志かのはま松

暁五月雨

338 天川なを雲とちてみしかよのあくるをおしむ五月
雨の空

五月雨久

339 いたつらに月のさかりのすくるまで一夜もはれぬ
五月雨の空

340 あしふきのこやの軒はも朽ぬへし隙なくつゝくさ
みたれの比

花山院入道大納言家にて

341 五月雨のふるにつけてやしけるらん空も梢もはれ
ぬ比かな

野五月雨

- 342 夏草のふかさもなをやまさるらん野沢の水の五月
雨の空
- 源大納言家詩哥合、夏朝
- 343 夏草のしけるにつけて朝なく露さへふかくなり
にける哉
- 建武二年内裏千首に、夏植物
- 344 ことの葉のさかゆる御代に夏草のふかくもいかて
みちをたつねむ
- 民部卿家十首に、夏草
- 345 夏草のしけみもふかくなりけり分ゆく鹿のみえ
ぬはかりに
- 野夏草
- 346 なつふかき野中のし水うつもれてむすふはかりに
草そしける
- 民部卿家老若哥合に、風前夏草
- 347 夏草のしけみもわかぬ萩のはをしらせてすくる野
への夕風
- 庭夏草
- 348 庭のおもはしけらぬかたもなかりけりいつくを草
- のまかきとかみん
- 金蓮寺三首に、瞿麦
- 349 故郷の野となる庭にさきにけり秋やうつらのとこ
夏の花
- 等持院贈左大臣家五首に、鵜川
- 350 玉しまや七瀬をのほるうかひ舟川上なからあくる
夜はかな
- 聖護院五十首に
- 351 よしの川いもせの山のなかとてやくたすう舟もよ
るをまつらん
- 前藤大納言家月次五首、照射
- 352 たちぬる、しけきは山の露のまにともしのかけも
あくる比かな
- 御子左大納言家にて、同心を
- 353 小倉山ともしのまつををのれさへみねたちならし
鹿やまつらん
- 同家三首に、暁更照射
- 354 宮きの、この下やみにともししてあかつき露のか
きをそしる

独吟百首に

355 明やすきなこりをかねておもふには出るもおしき

夏のよの月

山夏月

356 さらにたにみるほとなきを夏山のしけきこのまに
月そふけ行

夏月

357 またよひもあけぬる月のいかにしておなし雲ちを
行めくるらん

金蓮寺にて、同心を

358 夏草の露わけころもほさぬまにやとかるそての月
そあけ行

359 みねこえて入まてしたふ夜はもかな雲まにあくる
夏の月かけ

民部卿家百首に

360 かさゝきのみねとひこゆるほともかなと山にあく
るみしか夜の月

入道前太政大臣家三首、山夏月

361 夏山はこのまもみえすむら雲のとたえをのみや月

はもるらん

夏月

362 板まよりもりくる月にかこつかなまやのあまりに
明やすきよを

等持院贈左大臣家三首、同心を

363 あくるまで空にのこりて夏のよの心もしらぬ月の
かけかな

同家五首に

364 山のはにかたふくみれは夏のよのあくるは月の
こゝろなりけり

花山院中納言家五首、浦夏月

365 みくまのゝうらく舟のほのくゝと月をはよそに
あくるみしか夜

前関白殿にて、猪無野夏を

366 みしか夜のゐなのさゝ原あけぬれとかけはありま
の山のはの月

雨後夏月

367 夕たちのはれまの月のほともなく村雲なからあく
る空かな

和哥所三首に、螢

368 夏引のちひきのいとのを、よはみみたる、玉とと
ふ螢かな

江螢を

369 いせの海のをの、ふるえにとふほたるあまもひろ
はぬ玉かとそみる

出羽守貞頼哥よみ侍しに、同心を

370 とふほたる空に光のみたれすはほり江にしける玉
とみえまし

河辺螢

371 あすか川かよふほたるはたをやめのかさしにさせ
る玉かとそ見る

民部卿家にて、沢螢

372 ほたるとふあさ、は水のあさしともみえぬはを
の、おもひなりけり

弾正尹親王家五十首に

373 とふほたるわか身はかけとなるまでに何ゆへもゆ
るおもひなるらん

御子左大納言家月次三首に、窓前螢

374 草深きやとにみたる、ほたるかなあつむるまと、
人やみるらん

草間螢

375 秋ちかきこれやほたるのおもひ草はすゑの露に影
そみたる、

陸奥守頼氏題さくりて哥合し侍しに、水辺螢

376 水のおもにもゆるさはへのほたるかな何にけつへ
きおもひなるらむ

同心を

377 いはし水いはぬおもひはつ、めともこかくれはて
すとふほたるかな

入道前太政大臣家三首、螢

378 とふほたるもえてかくれぬおもひとはしらてやさ
のみねをしのふらん

夏哥中に

379 おもひにはまよふならひをとふほたるひとりやを
のかしるへなるらん

380 とふほたるおもひのみこそしるへとやくらき夜は
にももえて行らん

381 とふほたるもえこそわたれはしたてのくらはしか
はのくらき浪まに

等持院贈左大臣家にて、水辺蚩

382 とふほたるもえてそみする山川のなみうつ岩の中
のおもひは

野蚩を

383 みやきの、このしたやみにとふほたる露にまさり
てかけそみたる、

聖護院入道親王家にて、同心を

384 草ふかみみえぬ野さはのむもれ水ありとやこゝに
とふほたる哉

等持院贈左大臣家三首、蚩

385 うき草のしけるさはへのみきはよりさそふかせあ
れはゆく蚩かな

聖護院五十首に、沢蚩

386 おもひのみほにあらはれて秋をまつ山田のさはに
とふほたるかな

御子左大納言家旬十首に、蓮

387 白露のたまれはそてにうちなひき村雨すらし池の

はちすは

夕立風を

388 外山まるならの葉そよき吹かせに音そさきたつ夕
立の空

389 ふきおろすかせそすゝしき山のはにかゝれる雲や
夕たちの空

二条入道大納言家三首に

390 ふれははやかたへそはるゝ山かせに行かふ雲のゆ
ふたちの空

夕立雲

391 このさとにふらぬもすゝしうき雲の山のはつたふ
ゆふたちのそら

夕立

392 夕立は杉のこすゑに雲きえてなこりの露に山かせ
そ吹

山蟬

393 山かせのふかぬたえまはなく蟬の声こそ松のひゝ
きなりけれ

394 なく蟬の声より外は夏もなし山かせそよくならの

したかけ

夕蟬

395 入日さすをかへのまつの一むらにくれてものこる

蟬の声かな

贈左大臣家三首、納涼

396 なく蟬の声もひとつにひゝきゝて松かけすゝし山

の滝つ瀬

宰相典侍哥合に、夕納涼

397 鳴蟬のこゑもきこえすくれはてゝ木すゑに残る風

そ涼しき

夏哥中に

398 秋またて吹あきかせはそともなるならのこかけを

ならしてそきく

399 うちなひくのしまかさきの夏草に夕なみこえて風

そすゝしき

御子左大納言三首、雨後夏月

400 村雨のふるほとよりもすゝしきはは山の露にいつ

る月かけ

等持院贈左大臣家にて、夏雨

401 をく露のゝこるもすゝしうつせみのは山にはるゝ

村雨の空

左衛門佐和義朝臣家にて、納涼を

402 なく蟬のは山のすゑの夕日かけのこるもすゝしを

かのへの松

等持院贈左大臣家五首、納涼

403 此まゝに秋をもしらしときは山夏こそなけれ松の

下かけ

聖護院宮泉殿講せられし哥に、同心を

404 しけりあふ木の下かけをなかれきて山をいつみの

水そすゝしき

二品法親王家五十首に

405 たちかへりあすもきてみむ石ま行音もすゝしき水

のしらなみ

御子左大納言家十句十首に、泉

406 せき入てむすふいつみのすゝしきは秋にもこゆる

水の白浪

贈左大臣家にて、泉避暑といふことを

407 せきいるゝやとそすゝしき岩つたふ水をとめてや

秋のきぬらん

金蓮寺にて人々哥よみ侍しに、納涼

408 あふ坂の関のしみの夕すゝみ秋やはこれにすきの下かけ

御子左大納言家旬十首に、同心を

409 しつかなる心たにこそすゝしきにわかすむさとは山かせそふく

定海僧都、勸学院障子に、湖のあたりの名所

を絵にかきて人々に哥よませ侍しに、志賀辛

崎夏

410 みそきする夕をかけてさゝなみやしかの浜松秋かせそふく

河夏栳

411 みそきして秋はあすかのかはの瀬に夕なみたかく風そすゝしき

陸奥守頼氏朝臣家にて、六月栳

412 みそきしてあさのはなかつ川の瀬の井せきの水に夏もとまらず

等持院贈左大臣家三首に

413 水のおもにあさのはなかつみそき川としのもなか

やこよひなるらん

民部卿家百首に

414 みそきしてかへらぬさきにたつた川夕付鳥のこゑそあけゆく

草庵和歌集巻第四

秋上

聖護院二品親王家五十首歌に、早秋

415 さゝの葉のみ山もさやに吹かへてよのまのかせに

秋はきにけり

入道前太政大臣家三首、初秋朝露

416 あけわたるあしたの原にをく露のさやかにみえて

秋はきにけり

独吟百首に

417 音たてゝはや吹にけりかけろふのをゝ秋つのあさのはつかせ

弾正尹親王家五首哥合に、初秋風

418 行水のふちせならねとあすかゝせ昨日にかはる秋

はきにけり

二条入道大納言家一日千首に、初秋

419 たかまとの野ちのしのはら打なひきあさをく露に

秋はきにけり

御子左大納言家三首に、同心を

420 をきそむる露もけさより秋しのやと山のかせの音

かはるなり

民部卿家七夕七首に、朝初秋

421 萩のはのかせのみけさは音たて、露もをきあへぬ

秋はきにけり

同家百首に

422 いつしかと衣手す、しひくらしのなくゆふくれの

あきのはつかせ

兵庫頭長秀家にて、野露

423 吹にけりをけはかつちるしら露の玉のよこの、秋

のはつかせ

御子左大納言家四季百首に

424 すきむすふあらしも露もあはれてふことをあまた

に秋はきにけり

同家旬十首に、残暑

425 秋きてもあふきのかせをならすかなことしは露や

さきにをくらん

花山院大納言家三首に、七夕露

426 をく露にあさひくいとを七夕のかさしの玉のをに

やかさまし

等持院贈左大臣家七首に、七夕雲

427 さそなうきけふより外はあま雲のよそなる中のほ

しあひの空

七夕橋

428 けふはよも雨にさはらしかさ、きのはしよりかよ

ふほしあひの空

七夕月

429 ふけゆかは月も入なむよひのまにはやこきわたせ

天の川舟

右大臣家七夕七首に、同心を

430 あかすのみさそ契らん月かけも天の戸わたるほし

あひの空

贈左大臣家三首、七夕河

431 天川ふち瀬ともなく恋く／＼て中なるよとやこよひ
なるらん

聖護院五十首に、七夕

432 いつよりか天のかはせにわたしけむとしに一夜の
夢のうきはし

七夕鳥を

433 鳥のねも心あらなむほしあひの天のせきの戸あけ
まくもうし

434 天のかはたつそなくなる七夕のあふほともなくあ
けぬこのよは

七夕後朝

435 秋ことの天の川舟こきかへりおなし人にやわかれ
きぬらん

民部卿家百首に、閏月七夕

436 かさねてもあふせはなしに天川のちのふ月そ人た
のめなる

花山院入道大納言家にて、露を

437 秋風の吹にし日よりをきそめてなにそは露のあた
にみゆらん

同心を

438 草の葉にきゆれはやかてをきかへてあたるほと
もみえぬ露哉

和哥所月次三首、曉露

439 あさちふのすゑはをしなみをく露のひかりにあく
るをのゝしの原

独吟百首に

440 草も木も露けき秋のならひとや心なき身に袖のぬ
るらん

御子左大納言家にて、秋夕

441 露けさもむかしにまさるたもとかないそちの後の
秋の夕くれ

同家旬十首に

442 今さらにうしともいはし世中にたえてすむ身の秋
の夕暮

独吟百首に

443 ことはりとおもひなからもさひしきはみ山のいほ
のあきの夕くれ

萩

- 444 古郷はかきほにあまる萩のはにすゑこすかせのふ
かぬまもなし
- 445 ふるさとのまかきのおきに音たてゝところもさら
ぬ秋かせそ吹
- 446 萩のはの音せぬせともあるものをたえてやかせの
うきをしのはん
右大臣家百首に、庭萩風
- 447 下葉にそ露はをくらん秋かせのたえすすゑこす庭
の萩原
萩露
- 448 聞人の袖にそむすふ萩のはのかせにとまらぬ秋の
夕露
夜萩
- 449 夜もすから風におきふす萩の音をあかしかねたる
枕にそきく
海辺秋風
- 450 萩のはにきかぬもさひしあしそよくうらのみなど
の秋の夕くれ
白浪のはま松かえに音たてゝ秋ふくかせもいく夜
- 451
- 452 おちたきつ玉とみるまで滝の上のあさのゝ露に秋
かせそふく
野秋風
- 453 御子左大納言家月次三首、早秋風
鹿のねもいつよりきかむをかへなるわさたほに出
て秋風そふく
- 454 左衛門佐和義朝臣家にて、草花露
秋萩にをくしら露を枝なからぬかても玉とみやき
のゝ原
小鷹狩を
- 455 はし鷹のとやのゝ露にかりくらし帰たもとははき
か花すり
御子左大納言家三首に、野外萩
- 456 こ萩原はなさく秋そむらさきの色こきときとのへ
はみえけり
長秀家にて、萩露を
- 457 かり衣のへ分ゆけはしら露のしくれてうつる萩か
花すり

基任にさそはれて秋比、深草にまかりて

458 心をそうつしてきつるふか草やうつらなくの、秋はきの花

二条入道大納言家十首に、庭草花

459 露わけてとふ人もなし古郷のもとあらこの萩色かはるまで

人の千首哥よみ侍しに^(ママ)所にて、萩を

460 今は世にもとの心の友もなし老てふるえの秋萩の花

御子左大納言家五首哥に

461 夕まくれをくとみしまに秋はきのまかきの露はうつろひにけり

おなしき家の月次三首に、草花

462 さきましる野へのおはなは秋はきにすれる衣のそてかとそみる

勝女^(ママ)来て哥よみ侍しに、同心を

463 秋はきの花さきてこそふるさとは草にやつれぬまかきなりけれ

彈正尹親王家五首哥合に、草花露

464 さきましるはなにうつりてしら露の色はひとつに

みえぬのへ哉

前関白殿にて、秋植物

465 秋も猶ひとつ草葉とみゆる哉みたれてましる花の色く

独吟百首に

466 足引の遠山とりのはつお花ひとりぬるよの手まくらにせむ

霧中草花を

467 ほにいてしかひこそなけれ花す、きあらはれやらぬ霧のまかきに

御子左大納言家にて、薄

468 はつせめの手にまく玉や花す、きまねくたもとに秋かせそふく

469 夕まくれ露をくひまもみえぬまで草のたもとに秋かせそふく

讃岐守孝朝家にて、野径露

470 むさしのやかきりしられぬ秋の露分もつくさぬ袖や朽なむ

源大納言家詩哥合、秋夕

471 夕されはあさちみたれて白露の玉ちるをのに秋か
せそふく

寂恵法師哥合に、野外秋露

472 露にたにみたれやすきを白菅のまの、かや原秋か
せそふく

前関白殿にて、刈萱

473 分ゆかはなをやみたれむをく露にしたおれそめし
野へのかや原

御子左大納言家旬十首、同心を

474 世をいとふすかたはかりをかるかやのみたれやす
きは心なりけり

叢夕虫

475 草の名のおもひをしれと夕暮はおはなかもとに虫
やなくらん

民部卿家十首、夕虫

476 さのみなとねをつくすらんきりくすけふのみ秋
の夕ならぬに

等持院贈左大臣家にて、蛩

477 おもひあるねをこそたつれきりくすよるはほた

るのもえし草葉に

478 秋くれは何をおもひのたねならん山のいはねのま
つむしの声

不断光寺にて、夜虫を

479 草の原をく露さむみ秋のよのなかきをかこつまつ
むしの声

閑庭虫

480 我かとてとふ人もなしふるさとのあさちか庭のま
つむしの声

暁虫

481 きりくす露はね覚のなみたともしらてまぐらの
したになく也

民部卿家八月十五夜十五首、旅館聞虫

482 かりねする草のとさしのおくるまてまぐらにたえ
ぬ虫の声かな

霧中鹿

483 霧ふかき山のこかけにきこゆなりくる、もまたぬ
さをしかの声

二条入道大納言家三首に、暮山鹿

484 夕つく日いりぬるあとはをくら山まつふくかせに

鹿そなくなる

新日吉社三首に、夕鹿

485 うつろふを秋の色とやときは山夕日のかけにしか
のなくらむ

藤原基任よませ侍し五首に、田家夕鹿

486 秋の田のかりほのこ萩さきしよりくる、日ことに
鹿そ鳴なる

入道左兵衛督家五首、田家鹿

487 あかすのみきくともしらしひたはへていほもる小
田のさをしかの声

野鹿

488 あさちふのをの、草ふし露さむみよるはすからに
鹿そ鳴なる

聖護院宮五十首、夜鹿

489 恋わひて鹿はなけとも秋のよのなくやつまはつ
れなかるらん

同心を

490 ふくるまで鹿そ鳴なるをくら山こよひもつまやつ

れなかるらん

山鹿

491 たちこめて猶あさ霧のをくら山あくるもしらす鹿
やなくらん

鹿交草花

492 宮きのや朝たつ鹿もみゆるまで花のちくさに秋か
せそふく

朝鹿

493 野へは、やあけぬる後も霧ふかき山にかへりて鹿
やなくらん

494 あけゆけは山ちにしかのかへるまで露にふしみの
野への秋はき

聖護院入道親王家三首、月前鹿

495 待出るおなし尾上の鹿のねを月よりをくる夜はの
秋かせ

鹿声何方といふことを

496 ふきまよふ嶺のあらしのさそはすはそなたと鹿の
ねをや聞まし

不断光寺、遠鹿を

497 ね覚するわかなみたをもさそひけり鹿の音をくる

嶺の秋風

大膳大夫頼康佐女牛の若宮にて歌よみ侍しに、

野鹿

498 あはつのにねをなく鹿はあふさかのちかきかな

くつまやこふらん

金蓮寺五首に、鹿

499 秋なから草を冬野にふみならしつま、つ妻のたえ

ぬよもなし

彈正尹親王家五十首に

500 山とりの尾上の声のをのれさへたつる中につま

やこふらむ

野鹿を

501 いなみの、あさちか露をふみしたきさぬるよもな

く鹿ぞ鳴なる

御子左大納言家三首に、同心を

502 いはしろの松ふくかせになくしかは心もとけぬつ

まやこふらん

秋夜山さにて

503 このさとはをたもる声も鹿のねもまくらにちかく

聞ぬよそなき

法印慶運よませ侍し三首に、草花露

504 萩の上の露となりてや雲井とふかりのなみたも色

に出らん

元弘比八月十五夜に、御子左大納言東山庵室

におはして哥よまれしに、鴈を

505 秋はきの露となりてもと、まらておつるは鴈のな

みたなりけり

夕鴈を

506 ゆふ日さす田面はるかに鴈なきて秋かせさひしむ

ら雲の空

御子左大納言家十首に、月前初鴈

507 かりかねの山とひこゆる数みえて月よりはる、み

ねの秋霧

聖護院宮五十首に、田上鴈

508 霧深きみねとひこえてふもとなるいなはの雲に鴈

はきにけり

民部卿家八月十五夜十五首に、田家秋風

509 いほりさす山たのひたのうちはへてあけぬくれぬ

と秋かせそふく

御子左大納言家旬十首、駒迎

510 をはすてをいつかこえけむ相坂にこよひそ出るも

ち月の駒

聖護院宮五十首に、山月

511 たちのほる月はくもらてふしのねのなひくけふり

に山かせそふく

同心を

512 しろたへのふしの高ねの秋の月影も千さとの雪と

さえつ、

和哥所にて題さくりて哥よみ侍しに、嶺月

513 影清き月はかりこそ白雲の夕るるみねをたちのほ

りけれ

彈正尹親王家五首哥合、暮山月

514 月は、やこのまにみえて山のはに夕るる雲のはら

ふまつかせ

不断光院にて、岡月を

515 かすく、に松もならひのをかへよりこのもとみえ

て出る月かけ

ふしみなる所にて哥よみ侍しに、月

516 ふしみやま松の木のみを出るより田面はるかに月

そうつろふ

建武二年内裏千首、秋天象

517 まち出ぬふもとのさともなかりけり尾上の月やす

みのほるらん

関伽井宮月十首に、霧間月

518 たちこめてくれぬる空に秋霧のたえまもみえて出

る月かけ

応長のころよみ侍し百首に

519 まきの原つれなき山の下露に空行月のかけそうつ

ろふ

山月

520 よもすから露と、もにやもる山の下葉をかけて月

そうつろふ

駿河守行春よませ侍し哥に、深山月

521 まち出るみねは軒はにちかけれと月をこのまにへ
たて、そみる

522 御子左大納言家月十三首に、山家見月
月影そよもにさやけきみねの庵よそにやはれぬ雲
井なるらん

523 民部卿家哥合に、深山見月
なかめつゝすむともたれかしら雲の八重たつおく
のみねの月かけ

524 御子左大納言家三首に、山居月
むかしたにうきよのほかにみし月のかけをみ山に
なるゝ秋哉

525 法印浄弁よませ侍し三首に、深山月
木のまもるみ山の月の影なれやうきよの外の心つ
くしは

526 同心を
夜もすから露をはつゆとおく山の月にも袖をぬら
しつるかな

527 前藤大納言家にて、谷月を
山ふかみこかくれて行谷水のすむほとたにももら
ぬ月かな

勸学院障子に、鏡山秋かきたる所

528 さゝなみや山は鏡のなのみしてかけなるうみに月
そうつれる

529 光音寺僧正坊にて名所哥よみ侍しに、伯姨弁山
よしさらはなくさめかぬる身のうさををはすて山
の月にかこたむ

530 後花山院内大臣家五首、明月聞鴈
しら雲も跡なき夜はの月かけにはねうちかはし鴈
はきにけり

531 野径月を
かり衣すそのゝ露に行かれて月もうつろふ萩か花
すり

532 御子左大納言家にて、月前草花
こ萩原くるれはむすふ露の上に月と花との色そう
つろふ

533 同家九月十三夜十三首に、同心を
秋の野の尾花くす花さきしより色の千草に月そう
つろふ

534 月前薄
露なから色にうつりて秋のゝのおはなにまじる月

のかけ哉

右大臣殿十五首に、野外月

535 秋の夜は草葉をわかすをく露に月も光をかすかの、原

金蓮寺にて名所哥よみ侍しに、宮城野

536 みやきの、この下露もかくれなく雨にまさりて月

やもるらん

後花山院内大臣家五首に、月前草花

537 かせをまつ露ともしらてみやきの、もとあらのこ

萩月そやとれる

草庵和哥集卷第五

秋哥下

妙法院三品法親王家八月十五夜十五首哥合に、

待十五夜月

538 かねてよりまたる、秋のなかはとはしらてや月の
出かてにする

御子左入道大納言家十首に、八月十五夜

539 秋のよにてる月なみをなかとは水なき空のかけ

もみえけり

金蓮寺にて題をさくりて月百首哥よみ侍しに、

おなし心を

540 老てみるこよひの月そあはれなるわか身もいつか

なかはなりけむ

河月を

541 たけ川のふちのみとりも白妙によなくやとる月

のかけかな

里月

542 ふくるよの川音ながら山しろのみつ、さとにす

める月かけ

御子左入道大納言家四季の百首哥に

543 みよしの、たきつかうちに霧はれて山かせきよく

すめる月影

法院浄弁よませ侍し哥に、河月

544 玉しまやたつかはきりのはる、夜にうきてやとれる
月のかけ哉

きむやといふ所にとまりて

545 ふけぬるかたかせのよとにさすしほの音さへすめ

る月のかけ哉

法院長舜す、め侍し日吉社六首、秋

546 すみはてぬよかはの水に秋をへてみしよの月や猶
やとらん

將軍家に題をさくりて月十五首の哥よませら

れしに、河月

547 にふの川まきなかさはすむ月のかけと氷とおも

ひはてまし

兵庫頭秀哥^秀家にて、渡月

548 くる、より川霧はれて夜舟こくさほのわたりにす

める月影

妙法院宮十五首哥合、沢月

549 うつもる、沢へに月のやとるかなみくさかうへに

露やをくらん

葦間月

550 秋のよはやとかる月もあしのはにかくれてすめる

こやの池水

聖護院入道親王家三首に、月前草花

551 をく露にやとかる月のかけみれはおはなの浪もこ

ほる夜は哉

梶井二品法親王家に題をさくりて哥合せられ

侍しに、浦月

552 敷妙の床のうらなみなのみして月にねぬよのつも

る秋かな

和哥所三首、海月

553 いせの海にあまのうけなはなかしとも月みる夜

は、定かねつ、

等持院贈左大臣家にて、月似鏡

554 月かけも浪にそうつる二見かたいつれ神代のか、

みなるらん

海辺月

555 月みてもたつるけふりは心あるあまともいはし松

かうらしま

弾正尹親王家五十首哥に

556 もしほやくけふりはつらきあま人のそてにしも猶

やとる月かな

法印覺為坊にて、御子左大納言哥よまれしに、

浦月

557 月かけにけふりをたつるあま人やわか身をうらと

おもひしるらん

贈左大臣家にて、月前網を

558 月をのみみつのはまへにあひきして難波のあまの

ぬる夜はも哉

江月

559 いせのうみのをのゝふる江のはるゝとみなとを

かけてすめる月影

二条入道大納言家にて、浦月

560 塩木つむうらのいそやの月かけにこりすもあまの

けふりたつらん

贈左大臣家にて、人々月百首哥よみ侍し時、

月前篝

561 月をそきいそ山かけにのこる也あまのいさりにと

もすかゝり火

海辺月

562 あま人のさためぬやとも秋のよは猶あくかれて月

やみるらん

妙法院宮月十五首哥合に、嶋月

563 わたの原夕きりはれて浪まよりみゆる小嶋を出る

月かけ

海上月を

564 うきしつみしはしはみえてあかしかたたゆたふな

みを出る月かけ

湖辺月

565 塩やかぬしかのうら人いくあきかけふりくもらて

月をみるらん

里人

566 はるゝよのほしの光もみえぬまであしやのさとは

月そさやけき

古寺月

567 ふるさとにすみこしかけもかはらぬはならのあす

かの秋のよの月

賀茂神主雅久よませ侍し三首に、故郷月

568 月は猶すみこそまされさとはあれてあさちか原の

露のやとりに

御子左大納言家四季百首に

569 ふくるよのあらしにうすき村雲はかゝれと月のか

けそさやけき

聖護院二品法親王家五十首、竹間月

570 さ枝より月はもりきて竹のはのかけさへまとう
つる夜はかな

左兵衛督家三条にて、関月を

571 おさまれるよに相坂の関の戸は。かけならてさす
よはもなし

贈左大臣家にて、九月十三夜を

572 あきらけき御代の昔を秋よりや月もなにおふこよ
ひなるらん

月前鶏

573 月かけはあくるもわかぬ関の戸に何をしるへに鳥
のなくらん

讃岐守孝朝哥よみ侍しに、里月

574 月みてもなくさむ人やさらしなのさともたえて
秋をへぬらん

贈左大臣家にて、月前猪を

575 秋のよはふすみの床のいかならんやすくもぬへき
月のかけかは

田家月

576 わか門のわさたかりあくるいなむしろ露しく床に
月をみるかな

577 よもすから田面の月にかけてみえていなはの雲は月
もへたてす

独吟百首に

578 秋の田のかりほの廬をもる露も袖にしらるゝ月の
かけかな

民部卿家七首に、月

579 わきてまたうき身の友となりにつり物思ふそてに
やとる月かけ

580 不断光寺庵室人々来て哥よみ侍しに、野径月
露わくるをのゝしの原草葉にも袖にもあまる月の
かけ哉

元盛さそひて住江の中嶋の月を見侍しに

581 おもひ出はのちも心やすみのえの松の木のまのあ
り明の月

左衛門佐和義朝臣家にて、月を

582 なかめてもなくさめとてやかくはかりうき世の中

に月はすむらん

入道前太政大臣家哥三首に、暁更月

583 をきまさるあかつき露にかけみえて猶いりかたの
月そさやけき

二条大納言、小藏大納言などともなひて、難

波月見にくたりて、五首哥よまれしに

584 やとしつるかけもひとつにみゆるまで月そかたふ
くおきつしら浪

民部卿家八月十五夜十五首、故郷残月

585 さとは荒てあさちか原の月かけに夕付鳥のこゑそ
のこれる

御子左入道大納言家にて、月前露といふことを

586 山のはにかたふくまでとみる月にきり立のほりあ
くるよはかな

長秀家にて、暁月厭雲

587 月かけのかたふくたにもうきものをそなたのみね
に雲そかゝれる

弾正親王家五首、暁月

588 入かたのみねの木のまをもる月そ心つくしのかき

りなりける

贈左大臣家五首に、朝霧

589 いるまでは月もくもらてあくるよの空よりふかき
みねの秋きり

河霧

590 あしろ木のあたりしられて朝ほらけ霧にいさよふ
うちの川なみ

御子左大納言家にて、渡霧を

591 いと、またわたりをとをみいつみ川山こそみえね
秋の夕きり

田上霧

592 夕日さすとはたのいなはたえくに霧はれのこる
秋やまのもと

御子左大納言家四季百首に

593 さらてたに秋の月かけのほとなきにきり立こめて
くる、空哉

民部卿家八月十五夜十五首に、湖上秋霧

594 霧深きかた、のおきの浪まよりくれぬといそくあ
まのいさり火

595 人々伏見なる所にて哥よみ侍しに、暮山霧
ふしみ山ふもとをこむる夕きりにくるれはかへる
みちやたとらむ

梶井宮哥合に、川霧

596 すみた川朝きりふかしわたし守ありやなしやもみ
えぬはかりに

民部卿家十首に、同心を

597 山川の水のまに／＼はれやらてあらしに残る秋の
朝きり

浦霧

598 夕きりのまかきのしまやこれならん浪まそはれぬ
塩かまのうら

朝霧

599 よもすから吹くるかせの音たえて朝きりふかし庭
のはきはら

秋夜雨といふことを

600 秋のよはねやのいたまもつれなきに限しられぬ雨
の音かな

二条大納言家三首に、野鶉

601 霧たちてうつらなくなり山しろのいはたのをの、
秋の夕暮

独吟百首に

602 尾花ちるいはたのをの、秋かせにうつらの床や夜
さむなるらむ

民部卿家百首に

603 月草の色にさけはやあさかほのうつろひやすき花
とみるらん

二条入道大納言、長樂寺なる所にて、人々さ

そひて題さくり哥合せられ侍しに、擣衣

604 里人は衣うつなりしからきのと山の秋や夜さむな
るらん

弾正宮三首、月前擣衣

605 色かはるまさきのかつらなかきよのと山の月にこ
ろもうつなり

左衛門佐和義朝臣家三首、擣衣

606 萩の葉にあらぬきぬたも秋かせの吹につけてや音
にたつらん

聖護院二品親王家五首に

607 さとは荒て秋かせさむみすか原やふしみのくれに

衣うつなり

彈正尹親王家五十首、擣衣

608 秋の夜はたれまちこひておほとものみつのとまり
に衣うつらん

月前擣衣

609 ふくるまで誰をまちてか月まつといひつる人の衣
うつらむ

人々金蓮寺にて哥よみ侍しに、擣衣

610 まつ人は遠山すりのかり衣ひとりいく夜か霜にう
つらん

秋哥中に

611 露深きみちのしは草うつろひてふるき都は衣うつ
なり

擣衣幽

612 いかにしておとろかすらん夢よりも碓の音はさた
かならぬに

御子左大納言家にて、擣衣

613 秋寒き山おろし吹てまつ人もきまさぬよはに衣う

つなり

里擣衣

614 秋の夜はおとろかさるゝさと人もまたやきぬたの
音をそふらん

関伽井宮にて、擣衣

615 音羽山をとも夜さむの秋かせに関のこなたも衣う
つなり

夕擣衣

616 たれをまつ宿ともみえぬ浅茅生にくるれは人の衣
うつらん

山家擣衣

617 山さとは木の葉色つく秋かせのさむきゆふへにこ
ろもうつ也

618 やまかつのこやにたく火のかけみえて秋さむきよ
の衣うつなり

二条大納言家月次五首、月前擣衣

619 あさち原月より外にすむ人のありとしられてうつ
ころも哉

関伽井宮月十首に、同心を

620 なかむとて月にねぬよをなにと又きぬたの音のお

とろかすらん

御子左大納言家十首に

621 秋はきの花すり衣月をたに猶うつしてや夜はにう

つらん

花山院入道大納言家にて、遠村擣衣

622 夕煙ほのかにみゆる山もとにをとをもたて、うつ

衣かな

二条入道大納言家にて、難波五首、海辺擣衣

623 あまのすむうらのいそやに音たて、浪よりほかに

うつ衣かな

同心を

624 風そよくあしの葉かくれ音たて、こやもあらはに

うところも哉

里擣衣

625 さとことに衣うつなり秋のよの夢てふものは誰む

すふらん

626 あれのこるさとをしらてやみなせ山ふもとの霧に

衣うつなり

夜擣衣

627 なくむしはよはる夜さむの露霜に猶をとたかくう

つ衣かな

628 と山ふくあらしをさむみ秋しのやしのに衣をうた

ぬよもなし

御子左大納言家にて、菊

629 よしさらは霜もをきそへ菊の花またうつろはぬ色

とみるまで

前関白家にて、同心を

630 うすくこきうつろふきくの籬哉これも千種の花と

みるまで

法印浄弁月次三首、月前菊

631 長月の在明の月のよをさむみうつろひにけり庭の

しらきく

前太政大臣家にて、菊籬月

632 うつろふも猶白妙の色なれやまかきのきくを

てらすイ
しらす月かけ

御子左大納言家にて、残菊句を

633 庭の面にうつろふきくのこむらさきかれなて句へ

霜はをくとも

贈左大臣家五首に、菊

634 露霜はうつりゆくとも君か代や猶なか月のしらき

くの花

金蓮寺にて、秋雨を

635 晴くもる時雨にかさむ秋の袖露はなか／＼ほすひ
まもなし

秋田

636 かとみしたのもの雲はなけれどもおしねほしあ
へす空そしくる、

大原野にて時雨のし侍しに

637 色かへぬ松にしくれのをしほ山もみちを分て染つ
くすらん

民部卿家百首に、紅葉

638 秋ふかきやの、かみやま露霜の色ともみえすもみ
ちしてけり

同心を

639 みむろ山うつろひゆくを限とやまなく時雨のはれ
くもるらん

聖護院五十首に、紅葉

640 色／＼の錦ともみむもるやまのした葉はのこせ露
もしくれも

弾正尹親王家三首に、山紅葉

641 山の名のもるほともなし村時雨下葉の色は露やそ
むらん

紅葉遍といふことを

642 さとわくとみえし時雨も限あれはのこる山なく染
つくすらん

宗尋法印すゝめ侍し日吉社六首に、名所紅葉

643 染てけり空に時雨のはる、まも露は小倉の山のも
みち葉

前関白殿より、いつみとの、山のもみちの枝
につけて

644 よのつねの色とやはみる心さしふかくそめてし手
折もみち葉

返し

645 露霜のをき所なきもみちは、けによのつねの色と
こそみね

花山院入道大納言家にて、紅葉

646 をのれさへうつろふはかりそめてけり山の木のは
の秋のしら露

夕紅葉

647 くるゝまてはれぬ時雨の下もみちけふや千しほを
染つくすらん

不断光寺にて哥よみ侍しに、紅葉

648 むら時雨こそのもみちをそむるより松も錦の色と
みえつゝ、

秋の末に難波に侍しに、住吉神主国冬をとつ
れ侍つゐてに

649 秋かせのふくをたよりにもみちするいくたのもり
もいまやとふらん

返し

650 もみちするいくたのもりはちかけれと君しすまね
はとふかひもなし

金蓮寺にて、月前櫓

651 霧はれて月そうつろふくるゝより風もたちえのは
しのもみち葉

御子左大納言家十五首に、月前紅葉

652 立田山よるの錦もあれはれてもみちをいつる月の
かけかな

兼好庵室にまかりて哥よみ侍しに、暮秋月を

653 時雨する雲のたえまを行月のはやくもくるゝ秋の
空かな

続千載集奏覧の後、撰者住吉宮にまうてゝ、
五首哥講せられしに、同心を

654 在明のかけさへうすくなりけり月の宮こも秋や
くれぬる

独吟百首に

655 行秋のすゑのゝあさち霜かれてまたきに冬の色そ
みえける

暮秋の心を

656 わかるとて何おしむらんうきときとおもひし秋の
くるゝなこりを

小倉宰相中将家三首に

657 野も山も霜かれはてゝくれぬまのひかりはかりに
のこる秋かな

暮秋露

658 野へはみなしもにかはりてわか袖のなみたの露に

のこる秋かな

659 よしさらはわか物からの袖の露あすまでのこれ秋

のかたみに

前関白殿にて、九月尽夜といふことを

660 まよひても立かへれとや行秋の別を別はをくらさ

るらん

贈左大臣家三首に、閏九月尽

661 つねよりもなこりをそへて長月のかさなる秋そつ

ゐにくれぬる

草庵和歌集卷第六

冬哥

御子左大納言家三首、初冬

662 いづくにか秋を、くりて山かせの今朝は時雨をさ

そひきぬらん

北野社三首に、時雨

663 むら雲はまよひもはてす山かせの吹をしるへに行

しくれかな

二条大納言家三首、初冬時雨

664 冬きぬと誰につけてか神な月さとわくけさの時雨

なるらん

時雨

665 はれくもるさところかはれ神なつき空は時雨のふ

らぬまもなし

等持院贈左大臣家三首

666 いつくまで山めぐりしてむら雲の又かきくらし時

雨きぬらん

左衛門佐和義朝臣はしめてたつねきたりて、哥

よまれしに、時雨

667 柴の戸に又もこと、へむら時雨山めぐりする袂な

りとも

等持院贈左大臣家五首、時雨

668 松にのみ音をのこして山かせの吹よりはる、むら

時雨かな

大膳大夫頼康家に、夜時雨

669 時雨さへふりみふらすみ音す也さためなき世をお

もふね覺に

聖護院二品法親王家五十首、朝時雨

670 いつる日のかけもたまらぬ村雲にくもるともなく

ふる時雨哉

御子左大納言家十首、夕時雨

671 かきくらしふるかとみれば山のはの時雨を分て夕

日さすなり

風前時雨

672 山かせのふくほとはかりさそはれてよはれはは

る、村しくれかな

玉つしまにまうて侍し時、しのたのもりにて

時雨し侍しかは

673 たちよれはなをこそぬるれ村時雨しのたのもりの

千枝の雫に

等持院贈左大臣家にて、時雨

674 吹ま、にくもるとみればやかて又あらしにはる、

村しくれかな

刑部少輔広房、題をさくりて哥合し侍しに、

時雨

675 跡もなくはる、しくれをいつくより又さそひくる

あらしなるらん

民部卿家にて、同心を

676 神な月あらしのすゑのむら雲はまた誰さとのしく

れなるらん

金蓮寺にて、暁時雨

677 うきものとおもひもはてす_す在明の月にしくる、村

雲の空

尾上時雨

678 冬の夜のねやの板まはあけやられていくたひとなく

ふるしくれ哉

海辺時雨

679 もしほやくあまのいそやのむらしくれもるともし

らしぬる、袂は

住吉社百首哥合に、落葉

680 神な月よもの木葉をふくかせの山はしくれのふら

ぬ日もなし

独吟百首に

681 色をのみそむるとみえしもみちはの音はしくれに

いつならひけむ

贈左大臣家にて、落葉

682 木のもとにつもるもみちをいつくにも猶のこさし
と山かせそふく

金蓮寺十首歌合に

683 露霜はかゝれとてしも山かせのさそふ木葉を染す
や有けむ

彈正親王家五十首に

684 吹ほとはつもりもやられて夕かせのよはれは庭そ木
葉なりける

路落葉

685 ときは木のかけふむみちもみえぬまでもみち吹し
く冬の山かせ

源光政かもとにて哥よみ侍しに、落葉

686 露霜のそめし千しほの色なからつもるも涼し庭の
もみち葉

落葉混雨

687 神な月そめし木葉のふりそひて時雨も色にいつる
ころかな

御子左大納言家三首、落葉

688 うつろふとみし秋よりも庭のおもにちるそ木のは
の限なりける

689 大井川山の木のはの時雨にそるせきの水も色かは
りける

民部卿家三首

690 今はまたさそひし水をせきとめて木のはそつもる
冬の山川

聖護院五十首に、河落葉

691 もみちはの雨とふるにもまさりけりせかれてよと
む山川の木

落葉

692 山たかみかせにちりくるもみち葉をした行水や又
さそふらん

法印淨弁もとにて、落葉霜

693 けさみれはたえく霜のむすふかなつもる落葉に
かせや吹けん

民部卿家百首

694 霜ふかくおち葉かうへもなりにけり冬の、鹿のあ

とみゆるまで

前関白殿にて哥よみ侍しに、庭落葉

695 庭にのみちにしのちは音す也木葉やかせをさそ

ひきぬらん

勸学院障子にやす河の冬かきたる所

696 もる山の下葉のこらすなりぬらしやすのかはなみ

音むせふなり

落葉

697 神なつきつもとみるやつくはねの嶺よりおつる

木のはなるらん

等持院贈左大臣家三首、殘菊

698 さかりとそ猶匂ひける菊の花秋なき時の霜のまか

きに

民部卿家百首、夕寒草

699 夕くれはうかりし秋のかせの音をかれ葉にのこす

庭の萩原

冬哥中に

700 今も猶秋みしはなのおもかけにたち野の原の霜の

下草

701 かれのこる草葉もまれになりにつけりたえく霜の
をくとみるまで

御子左大納言家にて、野徑寒草

702 霜かれの今や草のはてならんかきりもみえぬむ

さしの、原

金蓮寺十首哥合に、寒草

703 朽のこるかれの、霜にうつもれてなのみ秋つのを

の、浅ちふ

704 散つもる木葉や霜をへたつらんかる、そをそきも

りの下草

人々北白川なる所にて十首哥講せられしに、

閑庭寒草

705 とふ人のあとたえはてしよもきふはかれてそい

と、さひしかりける

左衛門佐和義朝臣家にて、野寒草

706 秋もはや遠さとをの、冬かれにのこるもこほる萩

のした露

冬月

707 月そなを木のはくもらて残ける秋のかたみはとめ

ぬあらしに

708 木のまもるかけもよをへておほあらしきの森の下葉
に月そうつろふ

法印淨弁月次三首に、冬月

709 ふけゆけは空にあらしの音さえて雲まにこほる月
の影哉

御子左大納言十首に、河冬月

710 さゆるよの月のやとかるなつみ川こほるもはてす
山かけにして

網代

711 かせさゆる田上川のこほるよもなみやたえくあ
しろもるらん

金蓮寺哥合に

712 はし姫のねぬよの友やあしろ守月かけさむしうち
の川なみ

北白川なる所にて人々講せられしに十首に、
(ママ)

河上冬月

713 夏見川霜をははらふあしかものうはけにこほる月
のかけかな

氷

714 かすかなる音そきこゆる冬さむみむすふこほりの
中川の水

彈正尹親王家五十首に

715 山かけの岩もる清水こほりゐてをとせぬ霜そ冬を
つけゝる

民部卿家五十首に、河氷

716 はつせ河井てこすなみのそのまゝにこほりてかゝ
るせゝのしからみ

滝氷を

717 おもひせく滝ならなくに冬さむみこほりてなみの
音も聞えす

718 亀のおの山の岩ねの松かせにこほりとたえぬたき
の音かな

氷

719 はや瀬川よとむ岩まのなかりせは氷やかねん水の
しらなみ

金蓮寺にて、池氷

720 夜もすからあらしさえつるさゝのはのさやまか池

はこほりゐてけり

贈左大臣家五首、江氷

721 はやし瀬はなを音たて、ふる川の入江のなみやま
つこほるらん

朝氷

722 このねぬるよこのうらなみこほりゐてけさはみき
はによる舟もなし

日吉社三首哥合に、湖氷

723 つり舟の汀こき出るあとはかりこほりにのこるま
の、うらなみ

御子左大納言家三首に、寒蘆

724 みしまえやさそな下ねもとけさらん氷にたてるあ
しの冬かれ

梶井三品法親王家三首に、池水鳥

725 冬の池のあしまあらはにかれしより猶水鳥の数そ
そひぬる

小倉宰相中将よませられし三首に、水鳥

726 あさき瀬はこほりやすらん山川のふちにそさはく
水鳥の声

聖護院入道親王家にて、同心を

727 をし鳥のうは毛の霜をはらふまに玉もの床やかつ
こほるらん

池氷

728 いけ水の鳩のかよひち絶しよりなみやこほりのし
たく、るらん

御子左大納言家旬十首、鳩

729 鳩とりのなみのうきすはかくれぬを下のかよひち
なにしのふらん

夜水鳥

730 をく霜はかさねても猶よやさむきふけてつまよふ
をしの毛衣

贈左大臣家三首に

731 をし鳥の床もさためぬうきねして枕なかる、冬の
いけ水

金蓮寺哥合に、水鳥

732 をし鳥のこよひいつくに友ねしてあさけの空をむ
れて行らん
同心を

733 夜をさむみ鴨のうは毛にこすなみのくたけて氷る

冬のいけ水

734 冬川の瀬にぬる鴨はおとろかて上毛をこゆる水の

しらなみ

小倉大納言など人々さそひて、うちにて哥よ

まれしに、川水鳥

735 河の瀬にうき水とりのとしをへて住けむ跡を尋て

そとふ

御子左大納言十首、水鳥

736 なにはえやともねのをしのさはく哉また深き夜に

塩やみつらん

わらはのかい侍し水鳥を、ひろさはの池には

なたせ侍しとき

737 やり水のせ。^はき岩まに住なれてさそひろ沢の池の

をし鳥

御子左大納言家にて、千鳥

738 霜さえて千とりなく也みよしの、きよきかはらの

明かたの空

海辺千鳥

739 松にふく塩かせさむみいほはらやみほのおきつに

千とりなく也

金蓮寺哥合に

740 風ふけはたかしの浜のあたなみをつはさにかけて

鳴鶴かな

御子左大納言家にて、千鳥

741 ふけぬるかさむき霜よの月かけもさしての磯に鶴

なく也

大膳大夫頼康家三首に

742 すまのうらや千とりなく也関もりのいと、うちぬ

る隙やなからん

潟千鳥を

743 ゆきかへり千とりなく也清見かたみほの松原ちか

きなみちに

磯千鳥

744 石見かた夕なみこゆるいそのうへにたつかとみれ

はゐる千鳥哉

延文三年聖護院入道親王家に、浦千鳥を

745 和哥のうらにみたひの跡も今は、やまれになりぬ

る友鴬かな

二品親王家五十首に

746 和哥のうらに跡をとめすは浜千鳥何につきてか名

をのこさまし

建武二年内裏千首に、冬動物

747 時にあふわかのうらはの友千鳥おもひなきにもね
にそなかる、

続千載集奏覧の、ち、大江広房もとにて哥よ
み侍しに、千鳥を

748 わかのうらやおなし入江に跡つけてかひあるけふ
の友千とり哉

青蓮院入道二品親王家にて、海辺千鳥

749 夕されは松をへたて、うら千鳥友よひかはすあま
のはしたて

法眼兼誉かもとにて哥よみ侍しに、千鳥

750 志かのうらの友とはおもへさよちとり昔の跡はた
ちはなるとも

大神宮のたちにこもりて哥よみ侍しに

751 をさ、ふくみねのあらしも日にそへて冬こもりゆ

く山のおくかな

金蓮寺哥合、篠霰

752 音さやくをさ、かうへの夕霜をはらふはかりにふ
るあられかな

竹霰

753 霜こほる朝けの窓の竹のはに霰くたくる音の寒けさ
霰似玉

754 氷とも玉そくたくる冬さむみあられみたれてふる
の滝つせ

前藤大納言家にて、古屋霰

755 軒はなるしのふの草は霜かれて音もかくれすふる
あられかな

民部卿家一日百首に、古屋霰

756 年をへてあれ行宿の板ひさしかくてもよには霰ふ
るなり

冬哥の中に

757 雪は猶つもりもやらすあすか風いたつらにのみさ
えくらしつ、

758 神な月時雨し日よりさ、なみやひらのたかねにつ

もるしら雪

金蓮寺歌合、初雪

759 雲かゝる遠山とりのおのへよりをろの初おのはつ

雪そふる

民部卿家五首、山雪

760 今朝はまつ山の端はかりうつもれて宮このよそに

ふれる白雪

入道前太政大臣家三首、朝雪

761 都にもさゆる雪けのけさはなと山のはにのみふり

つもるらん

法印淨弁かもとにて哥よみ侍しに、山初雪

762 山のはのうつみしほとそつもりける雲の跡なるけ

さのはつゆき

不断光寺にて哥よみ侍しに

763 冬かれの梢はいまたあらはれて松よりつもるみね

のしら雪

贈左大臣家五首、暁雪

764 冬のよもあくるそやすき山のはのこゆるや雪の光

なるらん

御子左大納言家にて、夕雪

765 今夜なを山ちやたえんくるゝまて雲にそうつむみ

ねのしら雪

日吉社三首哥合に

766 ふる雪そあらそひかぬる槇の葉をうつめははらふ

山のあらしに

大膳大夫頼康家にて、山雪

767 みわの山ひはらの雪のきえぬまに手折てはなのか

さしとやみん

贈左大臣家雪五首

768 はれて猶うつもれにけり山かせの雪ふきはらふ松

の下みち

行房朝臣六代中絶のあとをおこして少将にな

り侍しころ、雪のあした申つかはし侍し

769 白雪のあとをたつねてみかさ山ふるきにかへる道

そかしこき

返し

770 みかさやまみちある御代は白雪のふるきにかへる

あとい
みちも絶せず

松雪

771 松かえのつれなきほともあらはれてとしのさむき
につもる雪哉

等持院贈左大臣家五首、野雪

772 かくてしも色の千草は跡もなし雪の花の、明^{ほの}かた
のそら

左大臣殿にて、庭初雪

773 今朝はまつ跡をもつけし庭の雪つきてしふらは人
をまつとも

贈大臣家三首、庭雪

774 跡つけてとへとはいはし庭のおもにけさふる雪は
友をまつとも

残雪

775 かけうすき在明の月の残るかとおもへは庭にふれ
るしら雪

金蓮寺哥合、積雪

776 けさみれはやへともわかすあしふきの小屋のよの
まにふれる白雪

河辺雪

777 みよしのやいはとかしはもうつもれて川かせ寒み
ふれる白雪

民部卿家題をさくりて哥合し侍しに、曙山雪

778 関の戸のあくれはみえてあしからのやえ山^へ遠くふ
れるしら雪

野外雪

779 冬かれのゐなののにのこるふし柴のしはしかほとに
つもるしら雪

入道前太政大臣家にて、同心を

780 いかばかり山ちはふくなりぬらんいはたのをの
も雪ふりにけり

聖護院五十首に、峯雪

781 うつもれぬこの下かけもなかりけりあらしにつも
るみねのしら雪

源大納言家詩哥合、冬夜

782 野も山もさたかにみえてむは玉のやみのうつゝに
ふれるしら雪

暁雪

783 白妙の夕付鳥もうつもれてあくる梢の雪になくな

り

御子左大納言家十首、関路暁雪

784 関の戸は雪よりあけてなく鳥の声に中く夜その
こりける

聖護院五十首、杉雪

785 あけぬるかすきのむらたちみえそめて尾上の雪に
雲そわかる、

東山に住侍しころ、雪の朝民部卿たつねおは
しまして、哥よまれしに、山路雪を

786 君にさへとはれぬるかなふる雪にけふこむ人とお
もふ山ちに

関路雪

787 相坂やゆくもかへるもあとたえて関ちたとらぬ今
朝の雪かな

民部卿の少輔氏経家にて、松雪

788 み山にはいくへかつもる春たにもきえかてにせし
松のしら雪

浦雪

789 うつもれぬ浪もひとつにしろたへの藤江のうらの

雪のあけほの

790 ふしのねは雲そかゝれるたこのうらの雪にうちい
つるあけほの、空

勝如来て哥よみ侍し、関雪

791 ふる雪にみちたえにけり清見かた関守浪はひまも
ありしを

梶井の宮三首に、海辺雪

792 清見かた関の戸かけてあくるよの雪をなみまにみ
ほの松はら

793 ふる雪やこほりをかけてつもるらん汀そ遠きから
さきの松

浦雪

794 あま人のいそやのみちもうつもれてうらくく舟に
つもるしら雪

795 うらかせの梢にかよふをともし雪になるをのま
つのしら雪

入道前太政大臣家にて、雪中水鳥

796 池水にこほりてすまぬあしかものあとこそみゆれ
庭のしら雪

民部卿家に百首に

797 春よりも雪ふるころそみよしの、山はさなから花
とみえける

不断光寺にて、林雪

798 冬かれの雲のはやしにふる雪ははなの所といまも
みえつ、

雪哥の中に

799 雪つもる梢に花はさきにけりにほひや枝に猶こも
るらん

贈左大臣五首に、庭雪

800 跡いとふ宿と中くつけやらんとはすはつらし庭
のしら雪

801 今朝はまた跡おしまるゝ庭の雪にふらはとまちし
人やいとはむ

東山にすみ侍し比、雪朝花山院入道大納言家

802 より
都たにあとなき庭はさひしきに山さといかにけさ
のしら雪

返し

803 この葉の跡みさりせは雪ふかき山ちは猶やさひ
しからまし

法印長舜すゝめ侍し日吉社六首に

804 たち出し山のしら雪そのまゝに又もかへらて跡は
たえにき

二条大納言にて、深山雪

805 つもれたゝ入にし山のみねの雪うき世にかへるみ
ちもなきまで

寿量院二品法親王家十首、行路雪

806 行末やかよはぬほとにつもるらん山ちの雪にあふ
人もなし

御子左大納言家句五首に、山月照雪

807 はれて猶つもとそみる在明の月かけうつるみね
のしら雪

贈左大臣家五首に、鷹狩

808 夕日さすかりはのをのゝ霜かれにいつくをかけと
鳥のたつらん

金蓮寺哥合

809 くれにけりとたちの原のかり衣かへるたもとに霜

のをくまて

前藤大納言家にて、夕鷹狩

810 けふは、やとたちもみえすくれにけり又やくるす
のを、みかりは

贈左大臣家三首、鷹狩

811 みちのくのしのふのたかのなもしるくみたれてす
れるかり衣かな

入道前太政大臣家三首に

812 はし鷹のとやまの月のいつるまでふもとの、へを
かりくらしつ、

武蔵守師直家にて哥よみ侍しに、神楽を

813 とやまなるまさきのかつらくりかへしうたふ霜よ
の月そふけぬる

御子左大納言家十首、遠炭竈

814 すみかまのけふりそしるく立のほる雲はゆふゐる
をちのたかねに

同家三首に、炭竈

815 冬さむみ雲はこほれるおく山にけふりまかはぬま
きのすみかま

おなし心を

816 すみかまもそことしられてしからきのさとより外
に立けふり哉

雪中早梅

817 うつもる、かきはの雪に匂ふなり春のとなり匂
ふ梅かえ香イ

御子左大納言家十首に、早梅薫風

818 むめかえに風こそにほへうくひすのしるへはまた
き春のこなたに

歳暮

819 みるかけもはやとしくれてますか、みうつりやす
きは月日也けり

入道前太政大臣家三首、歳暮雪

820 朝ことのか、みのかけにふる雪の雲にもはれぬと
しのくれかな

独吟百首に

821 おしみこし身のいにしへのならはしにすて、もな
けく年のくれ哉

御子左大納言家十首に、歎歳暮

822 つもりては月たに老となるものをつらくもとしの

くれてゆくかな

歳暮

823 時しもあれおしむとすれと冬の日のかけもほとな

くくるゝとし哉

法印浄弁月次哥に、山家歳暮

824 山ふかくいそくならひになき身にはおほえてい

とゝくるゝとしかな

歳暮を

825 あつまやのまきの板戸のいたつらにあけくれての

みくるゝとし哉

826 しつかなる身にこそおしめなへて世はいそくにし

らぬ年のなこりを

御子左大納言家にて、おなし心を

827 はては又身にこそつもれとゝまらてくれ行としや

たちかへるらん

前太政大臣家三首に

828 あまのはらめくる月日のつもりきてとしの光もつ

みにくれぬる

応長比よみ侍し百首に

829 はつせ山花より雪になかめきて入あひのかねにと

しそくれぬる

聖護院五十首に

830 おしむらん心はしらす人ことにいそくとみゆると

しのくれかな

等持院贈左大臣家五首、歳暮

831 おしめともなかるゝとしははやせ川の浪のしはし

や猶おほれまし

聖護院入道親王家三首に、歳暮

832 老のなみ又としくれて七そちのみちくるしほにく

るゝ袖かな

草庵和歌集卷第七

恋上

御子左入道大納言家四季百首に

833 あらし吹山の尾上を行雲のはやくも人にかけて恋

つゝ

初恋

834 つくはねのにゐくはまゆの糸なれや心ひくよりみ

たれそむらん

入道前太政大臣家三首に、同心を

835 はしたかのはつかり衣露分てならはぬ恋にぬる、

そてかな

後岡屋前関白家三首に

836 やきすてし尾花かもとの草なれやいまより下にも

ゆるおもひは

妙法院三品親王家八月十五日夜哥合、寄月初恋

837 たつねきていつしか月のやとるかな我たにしらぬ

袖のなみたを

御子左入道大納言家旬十首に、思

838 いかにせんおもひのみこそしるへともたのみかた

きは恋ちなりけれ

聞恋

839 えそしらぬよしの、たきも音はかり聞より袖にお

つるものとは

金蓮寺にて、寄滝恋

840 なかれての名こそおしけれおもひせく袖になみた

のなきなくもかな

入道左兵衛督五首に、思不言恋

841 何ゆへにおもひそめける心とてかくとも人にもら

しかぬらん

梶井二品親王家三首、忍恋

842 よそなからなる、につけて中へにおもふ心をも

らしかねつ、

御子左入道大納言家旬十首に、寄湖恋

843 塩やかぬうらにけふりはた、すともおもひありと

やうちいてのはま

恋の哥の中に

844 みたれてもさそとなみえそ人しれすをさふる袖の

しのふもちすり

845 いかにしてつ、みはてまし心にも袖にもいまはあ

まるなみたを

金蓮寺十首哥合、忍恋

846 おもひせく心はかりやなみた川そてより外にかく

るしからみ

御子左大納言家にて、同心を

847 よしさらはふちともよとめなみた川思心のそこみ
えぬまで

玄勝藤原宗基よませ侍し十首に

848 せきわふるなみたの河のはやきせはをとたつはか
り成にけるかな

兵庫頭長秀の五首に、寄池恋

849 かくとたに岩ねの池にせく水のふかきにつけても
らしかねつ、

忍恋を

850 何ゆへといはてなみたをもらしなほうき人しもや
わか名たてまし

851 たえすくむあまのいそやのもしほ火の下にはもえ
てぬる、袖哉

852 おきつかせけふりふきしくもしほ火のもゆとも
た、ぬうき名とも哉

御子左大納言家旬十首に、寄藻恋

853 いかにせむなひく玉ものせをきよみしたのみたれ
もかくれなきよを

同家四季百首に

854 あはちかたなたこきわたる舟人のくるしとよそに
みえぬはかりそ

寄煙恋

855 ことうらになひかぬほとそ夕煙わか下もえのたの
みなりける

長秀月次五首に、寄山恋

856 雲かゝるふしのたかねにたつけふりかくれはつへ
き身のおもひかは

おなし心を

857 かひなしや山のあなたにたつ雲のしられぬ中にお
もひきえなは

聖護院二品親王家五十首に、忍恋

858 袖のうへにおちなむ後やおもひせく心のたきは人
にしられん

御子左大納言家に、三代集詞にて哥よみ侍し
に、袖くつるまでを

859 なみた川そてくつるまでしのひきてかひなくもれ
む名こそおしけれ

左衛門佐和義朝臣家にて、忍恋

860 さてもゝるうきはしらすなみた川心ゆるさぬそ

てのしからみ

忍涙恋を

861 われにうき人ゆへおつるなみたとやせくも心にま

かせさるらん

長秀、北野社にこもりて哥よみ侍しに

862 せきわふるなみたのほとをおもふにはいつくによ

とむうきなゝる覧

前藤大納言家十首、忍久恋

863 年をへて忍ひしかたのくるしさをおもふにさへそ

もらしかねぬる

左衛門佐和義朝臣家三首に、同心を

864 今は猶つゝみやかねんくれなゐになみたの玉そ色

かはりぬる

寄草恋

865 いたつらにしけさまされとかひもなしいはてしの

ふの山のした草

住吉社哥合に

866 しられしなしのふか岡にかかる草のみたれて下にむ

すほゝるとも

民部卿家にて、夏恋

867 音にたにたてそかねぬるあふことは夏の、おきの

しけきおもひは

虫声恋

868 露ふかき萩の上葉のかせたにも音きくにのみぬ

るゝ袖かは

侍従中納言、人々さそひて花みられし時、寄

花忍恋

869 つゝみこしおもひの色ももらさはや花は枝にもこ

もらさりけり

民部卿家百首に、寄思草恋

870 いまさらに色にやいてんおもひ草野へのおはなの

もとのこゝろを

中西入道弾正尹親王家にて、寄萱恋

871 数ならぬみむろの山の岩こすけいはねは下になを

みたれつゝ

大膳大夫頼康家にて、忍恋

872 うき名たに跡にたえすは恋しなむけふりのはてを

なけかさらまし

同心を

873 今は世にもれもやすらんわれにこそ人はしらせぬ

うきなゝりとも

874 うき名にもなかるゝそてのなみたかな心のたきを

せくとせしまに

聖護院入道親王家にて、忍恋を

875 いたつらにせくにやならん世にもるゝうきなをし

らぬなみたなりせは

御子左大納言家旬十首、寄糸恋

876 心からたつなくなるしくかうちめの手染のいとの色

にいてつゝ

恋哥中に

877 身にかへておしむうきなをもらすかなたか心なる

なみたならぬに

878 いたつらに忍こしかたとしをへてつるにもれける

そてのなみたを

民部卿家百首に、歎無名恋

879 あふことにかふる命になりやせむなき名をうしと

おもひきゆとも

立名恋を

880 世にもるゝうき名をせめて限なくつゝみし人にし

らせすもかな

忍涙恋

881 しのひえぬ心やみえむわか袖にせくはをとのはた

きならねとも

長秀家にて、寄滝恋

882 たかためもうき名はたてしせきわふる袖のみなと

は浪なかくとも

恋哥中に

883 あへ嶋やうのゐる岩にこそなみのまかふかたなく

たつうきな哉

884 おもひかねしらせて後はなかくによそなからた

にみえす成ぬる

聖護院五十首に、翫恋

885 人しれぬわかかよひちとおもひしをせきもるはか

りなりにけるかな

人々北白川にて講せられし十首に、忍不遇恋

886 恋しなむ命もしらす忍ふかなたかためおしきうき
なるらん

立名恋を

887 かはらしとたのむはかりの中ならはさのみたつ名
をなけかさらまし

恋哥中に

888 なみたをはつゝむものからもれやせむおもふあた
りのとはすかたりに

せきわふるなみたのほとおもふにはよそにうき

889 なをたてぬなりけり

なみたこそ色にいつとも誰ゆへにいふはかりをや

890 しのふもちすり

御子左大納言家旬十首、被妨人恋

恋哥中に

891 かくてのみへたてやはてんかはくちの関のあしか

きも^{もる人もなし}らぬよもし

恋哥中に

892 玉のをのとくる心もみえなくに我のみなとかおも

ひみたるゝ

893 さすかよもつれなからしとおもひしはたかゆるし

けるたのみなるらん

894 うき身にも猶こそたのめさきのよの契はしらぬな

らひはかりを

不断光寺にて、寄虫恋

895 うつせみの身をかへてともたのまれぬむなしき中

に恋やしなまし

不逢恋

896 つらきをもうきをもいまは恋しなぬわか身ひとつ

のとかになしつゝ

897 恋しなはけふりをせめてあまのすむさとのしるへ

とおもひたにしれ

前関白殿にて、同心を

898 うきなかにおもひもたえす玉かつら何にたのみを

かけてこふらん

寄河恋

899 川舟のふかきよとみにさすさほのをよはぬなかを

何と恋らん

寂恵法師題をさくりにて哥合し侍しに、春恋

900 あふことはかた山きゝすねになけと人こそしらね

霞かくれに

御子左大納言家旬十首に

901 とにかくに恋しねとてやよもすから夢にはみえて
ことつてもなし

民部卿双輪寺にて哥よまれしに、不遇恋

902 つれもなき心を何にたとへまし岩木は人をいといひ
やはする

恋哥中に

903 さりともと何をたのみし心にてうき身をします思
そめけむ

御子左大納言家旬十首に、詠恋 本ノマ、

904 なをさりに人やつたへんことのはのをよはぬをた
になけくおもひを

寄涙恋

905 つらしともいはてすきゆく身のほとおもひしら
ぬはなみたなりけり

前太政大臣家洞院三首、不遇恋

906 さきの世もかくやつれなき心にてむせ^{すか}ひもをかぬ
契なりけり

寄煙恋

907 恋しなむむなしけふりをせめてた、ならぬおもひ
のはてとたにみよ

忍不逢恋

908 こひしなんいのちをたにもなけかぬにうきなはか
りを何おしむらん

寂恵法師哥合に、不逢恋

909 かきりともいはてはいか、恋しなむたかおしむへ
きうき身ならねと

民部卿家十首、馴恋

910 すまのあまのあふことなみのぬれ衣なる、につけ
てほしそわひぬる

寄滝恋

911 みよしの、たきのしらあはのわきかへり心たかく
も人をこひつ、

恋哥中に

912 なには人かるとはすれとあしのねの下にたえぬは
おもひなりけり

913 おもひあれははま松かねを枕にてねぬよの床も浪

はかけけり

914 浅からすおもふ心のほとをたになれてしらるゝ契

ともかな

御子左入道大納言家旬十首に、寄薙恋

915 なみたをや玉にぬかましあやむしろをになるまで

にしき忍ても

幼恋

916 めくりあふほとをはいつとしらねとも人にはとけ

しるての下帯

老恋

917 月をのみ老となるまでなめきぬこぬよのかすの

つもるうらみに

前藤大納言家十首に、不逢恋

918 つれなきもふかき心をみえぬまのならひになして

猶したふ哉

民部卿家一日百首に、寄煙恋

919 恋しなん身をはなけかし我ゆへのけふりになして

哀ともみよ

聖護院五十首に、不逢恋

920 恋しなむ命そさらにおしからぬうき身は人のいと

ふのみかは

久恋

921 ふりはつる中ともせめてうらみはやよそのおもひ

にとしへぬる身を

民部卿家五首に、馴恋

922 うとからぬなかこそいとゝくるしけれうきもつら

きもかくれなければ

御子左大納言家三首に、不逢恋

923 つれもなき心のはてをみつるかな逢をかきりとお

もふ恋ちに

恋哥中に

924 行末の契はかねてしらぬ世にうしとていかゝおも

ひよはらむ

925 恋しなむ後さへつらしなをさりにあはれといはん

人のこゝろは

勝如来て哥よみ侍しに、寄雪恋

926 消はてぬかきりやいつそふしのねのならぬおもひ

の雪のしたもえ

聖護院宮五十首に、祈恋

927 つらきかな神のいかきにはふくすのうらみむとて
はいのりやはせし

祈久恋

928 みそきしていくたひかけつあふことは猶かた岡の
もりのしめなは

祈身恋

929 きふね川今はみなはもきえねとやみそきにかけん
浪のしらゆふ

侍従中納言、人々さそひて哥よまれしとき、

祈恋

930 夕かけてなをもつれなくいのる哉いまはいかきも
こえぬへき身を

御子左大納言家十首、祈神恋

931 名にしおはゝたゝ一ことをいふまでのしるへとも
なれかつらきの神

祈恋

932 ことはりをうくなる神にみそきしてうきをいとふ
と何かこつらん

前藤大納言家にて、風声催恋

933 萩の葉の音につけてもおもふかなかせも吹あへぬ
人のこゝろを

金蓮寺にて、寄月恋

934 よなくはなくより外のなくさめになれとや月も
そてをとふらん

九月十三夜御子左大納言家十三首に、寄月忍恋

935 くもるとも人にはいかてよなくの月をさなから
なみたにぞみる

藤大納言家十首、月夜恋

936 はかなしや月みるほとよひくをかよふ心とた
のむはかりは

民部卿家十首に、寄中恋

937 なかめてもむなしき空の秋きりにいと、おもひの
ゆくかたもなし

法印淨弁かもとにて哥よみ侍しに、冬恋

938 おもひやるなみたの空にたくふらんそなたの雲も
時雨てそ行

源中納言家にて十首哥よみ侍しに、夜恋

939

たえすやくあまのもしほのけふりたによるはおも
ひのまさりやはする

御子左大納言、東山なる所にて哥よませられ

しに、寄衣恋

940

ちきりたにまとをならすはあま人の袖にもまかへ
ぬるゝはかりは

隔恋

941

こかれてもかひこそなれみくまのゝうらよりを
ちのおきのつり舟

入道前太政大臣家にて、久恋

942

へたてける心をしらて水かきの久しきなかとたの
むはかなさ

前藤大納言家にて、被厭恋

943

かくはかりなきたるあさの空になとおもひははれ
ぬわか身なるらん

前関白殿にて、遠恋

944

おもひ出よおなし尾上のかねをたにきかてへたつ
る夕なりとも

等持院贈左大臣家五首、同心を

945

相坂をいつこえむともたのまれすあらぬ関ちのつ
らきへたては

御子左入道大納言家十首、寄関恋

946

いかにして都にちかきあふさかのせきは恋ちには
るけかるらん

夢遇恋を

947

おもひねにこゆるとみつる相坂の関しまさしき夢
ちともかな

寄厭恋

948

山ふかきふするのかるもかくてのみぬる夜もしら
す恋やわたらん

等持院贈左大臣家にて、契恋

949

あさからすちきるにつけてうき身には猶いつはり
のほとそしらるゝ

忍契恋

950

我さへにいつとはいはぬちきりかなかねて人めの
隙をしらねは

右大臣殿よませられし北野社三首に、夕待恋

951

またれすはたかいつはりもつらからし夕の空のな

き世ともかな

聖護院五十首に、待恋

952 たのましと人にはいひし夕暮のおもひもすてす何

またるらん

御子左大納言旬十首に、寄雨恋

953 雨ふれは猶たのまれぬ夕かなくもるさへとはなに

おもひけむ

後岡屋関白家にて、毎夕待恋

954 今こむとたのめをく日はなけれどもあふを限とま

つ夕かな

民部卿家十首、待恋

955 人まつもくるしきものといつはりになくさめとて

や契をきけん

御子左大納言家にて、寄縄恋

956 浦人のあみのうけなはくるよとは契をけともさた

めかねつ、

長秀か家にて、寄筏恋

957 たきつせにたゝむいかたのいたつらにとはれぬく

れをかさねつる哉

不断光寺にて哥よみ侍しに、待恋

958 とはれねはなか／＼つらきいつはりをたかためと

てか契をきけん

民部卿家八月十五日夜十五首に、秋夕待恋

959 秋の日のほとなくくるゝかひもなし人のいそかぬ

なかのちきりは

御子左大納言家にて、待恋

960 ふけぬとも猶やたのまんうき人のまたれて後と思

もそする

同心を

961 契こそ中／＼うけれこよひたにとはすは後のたの

みなければ

962 何とたゝまちならふらん契しは跡なき雲の夕くれ

の空

彈正親王家三首、月前待恋

963 いたつらにふけ行かけのつらければ人まつよひは

月もなかめし

民部卿家にて、忍待恋

964 ふけぬれは侘つゝぬへきかねの音に忍るなかは猶

たのむ哉

965 関守のうちぬるひまをまつほとは中く人のとふ
やうからん

御子左大納言家五首に、同心を

966 山のはにしはしまたれよ夜はの月出なはいはむこ
とのほもなし

法印慶運もとにて哥よみ侍しに、寄雨恋

967 ふる雨のさはりにたにもなしもせてはれまをみす
るよひの空哉

968 ふる雨にさはらぬまてはかたくともはれまをたの
む契ともかな

御子左入道大納言家十首、寄枕恋

969 しきたへのまくらもしらし待侘て独ぬるよの夢に
みゆとは

讃岐守季朝家にて哥よみ侍しに、契待恋

970 くれなはと契をきてしいつはりのまつあらはれて
ふくる夜はかな

御子左大納言家五首、連夜待恋

971 一夜にもうきいつはりはしらるゝを何のたのみに

たへてまつらん

小倉宰相中将家三首に、待恋

972 なをさりにおもひなしてやとはさらん又はまつへ
き命ならぬを

二条入道大納言家にて、契待恋

973 こよひそとおとろかさはやなをさりにいひしは人
のわすれもそする

待空恋

974 待侘てこよひもあけぬ鳥のねのうきを別となにお
もひけん

民部卿家百首に、同心を

975 ふけぬるをうらみむとたにおもふまにこぬ夜しら
るゝ鳥の声哉

恋哥中に

976 何ゆへのさはりと後にいひなさはまたいつはりの
かすやそはまし

御子左大納言家三首、待恋

977 たちぬるゝ山のしづくにあらねとも待夜は袖のか
はくまそなき

来不留恋

978 さはるともせめてはいかてみなと舟あしのよのま
にこきかへるらん

民部卿家十首、暁待恋

979 関守のあけぬとたのむほとにたにきてもやとふと
猶そまたるゝ

草庵和歌集卷第八

恋下

二条入道大納言家十首に、初遇恋

980 あたにのみむすふ契のはつおはなこよひはかりや
たまくらにせむ

等持院贈左大臣家三首、遇恋

981 とけぬともうつゝはつらしたのまれぬ人のこゝろ
のはなの下ひも

御子左大納言家十首、寄玉恋

982 とけて猶みたれそまさる玉のをのあはにむすへる
中の契は

民部卿家百首に

983 なひくともえやはたのまん吹かせに空ゆく雲のう

つりやすさを

贈左大臣家三首に

984 おもひねにみしをならひにこよひ又逢を夢かと猶
たとるかな

初会恋

985 山鳥のはつおのかゝみをのつからあひみるかけの
かはらすもかな

遇恋

986 しられしなまぐらのちりをはらひても心につもる
うらみありとは

右大臣殿にておなし心を

987 又こえむ夜はそしられぬ関守のうちぬるひまに相
坂の関

契遇恋

988 こよひこそ人のまことのしらるとも行末まではい
かゝたのまん

等持院贈左大臣家五首に

989 をのつから枕はかりをかはしまの水のこゝろは猶

そしらるゝ

祈遇恋

990 かゝるせもありけるものをきふね川袖のみぬれし

水の白浪

寄枕恋

991 波かくるはまゝつかねをまくらにてぬるともなし

にあらはれやせん

民部卿家百首に、旅宿逢恋

992 こよひたゝ露ともきえね草枕又むすふへき契なら

すは

法印浄弁月次三首、遇恋

993 恋くゝてまれにかさぬるさよ衣うらみさへこそ中

にありけれ

贈左大臣家三首に、不通夜恋

994 たかゝたにまつ夜ふけぬとうらむらんきてはほと

なくおきわかる共

二条入道大納言家にて、逢恋を

995 をのつから玉のをはかりあふよはのあけなは又や

おもひみたれん

996 ひとりねはあくるをまちしならはしに逢夜もしら

す鳥や鳴らん

聖護院二品法親王家五十首に、別恋

997 暁のゆふつけ鳥をうらみてもねにやはなかぬきぬ

くのそて

法印浄弁月次、寄鳥恋

998 あかつきの八こゑの鳥のなくもかなわかれを人の

うきにかこたん

弾正親王家五首、別恋

999 鳴ぬれと別もやられてとりのねの聞えぬまでにあく

る夜半かな

入道前太政大臣家三首

1000 鳥のねはうきものなからこのまゝに又いとふへき

あかつきもかな

不断光寺にて哥よみ侍しに、月前別恋

1001 このまゝに又やみさらん白妙の袖の別のありあけ

の月

右大臣殿にて、別恋

1002 うきなかは別ちをさへ関守のうちぬるひまといそ

きつる哉

同心を

1003 つらからすみるになこりのまさる哉出かてにする

けさのわかれち

九月十三夜御子左大納言家十三首に、寄別恋

1004 あけかたはうき人しもおもひこし月に別を又したふかな

前太政大臣家三首、別恋

1005 あくるよのみねのよこ雲わかれなはつらき月日を

又やへたてん

1006 たえぬへき心ならすはよこ雲のたちわかつともな

けかさらまし

大膳大夫頼康家にて、暁別恋

1007 かきりあれはおきわかれてもまきの戸に袖ひきと

めて又やしたはん

等持院贈左大臣家五首、契別恋

1008 いつとたにさたかにちきれこの暮をまてとはいは

ぬ別なりとも

入道前太政大臣家にて、後朝恋

1009 暮をたにまてとも人はちきらねとやかて又ねの夢

にみる哉

贈左大臣家にて、寄原恋

1010 あはてこし夜はたにそては露けきをわかる、けさ

のみちのさ、原

入道前太政大臣家三首に、後朝切恋

1011 逢まてはおしみきぬれと別ちのうきにのこらぬ命

ともかな

等持院贈左大臣家三首に、後朝恋

1012 あひみてもさなからのこることの葉をけさや中

くかきつくさまし

大膳大夫頼康家三首、同心を

1013 今朝やかておとろかさはや契しもくれまつほとに

かはりもそする

御子左大納言家東山なる所にて哥よまれしに、

寄玉恋

1014 はかなくや玉のをにせむかたいとのこなたかなた

にかくる契を

藤原宗基など哥よみ侍しに、寄草恋

1015 うかりける人のちきりのあさち原なひくとみれは
秋かせそ吹

御子左大納言家十首、疎恋

1016 なをさりにみゆるものからなからへてうらみをと
もにたえぬなか哉

民部卿家百首に、隔遠路恋

1017 ひとりぬる遠山とりの契たにかさなるみねをへた
てやはする

御子左入道大納言家十首、稀恋

1018 恋しなぬほとゝやさすかとし月のつもりはてゝは
おもひ出らん

おなし家百首に

1019 行舟のやへのしほかせひとかたにたのめはやかて
かはるなか哉

民部卿家三十首に、遇不逢恋

1020 すみあらすあまの磯やの塩けふりいつまでなひく
心とか見し

冬恋を

1021 水鳥のしたやすからぬわか中にいつか玉もの床を

ならへん

寄水鳥恋

1022 にほとりのかよひしみちもたえにけり人のうきす
を何たのみけん

後花山院内大臣家哥合、寄木恋

1023 たえぬるかつらき心もしら鳥のさきさか山のまつ
とせしまに

入道太政大臣家にて、木幡里恋といふことを

1024 かちよりそこはたのさともかよひにしなとか恋ち
のくるしかるらん

前藤大納言家月次三首に、絶久恋

1025 よかれそとなくさむかたにおもひしをさか^まはぬほ
ともつもとしかな

御子左大納言家十首、恨一夜恋

1026 うつゝともわかつてやみにし一夜こそ逢もかはるも
はしめなりけれ

おなし家十三首に、寄月恨恋

1027 今こんといひしもななき別にて月さへつらき有明
の空

寄月恋

1028 わすられぬおもかけはかりさたかにて月は涙には
るゝよもなし

関伽井宮月十首に、寄月恋

1029 あたなりや空行月をかたみにて猶おなし世とたの
むはかりは

前藤大納言家十首に

1030 まれにたにせめてとはゝとおもふこそ我さへかは
る心なりけれ

民部卿一日百首に、寄風恋

1031 淵は瀬にかはるちきりのあすかゝせいたつらにの
み身をなけきつゝ、

等持院贈左大臣家五首に、寄花恋

1032 何ゆへに心のはなのうつるらん山のさくらははる
かせそふく

おなしき家五首に、寄風恋

1033 数ならぬ身をうき草のすゑよりや心のあきのかせ
はふくらん

寄沼恋

1034 契のみあさかのぬまにさく花のかつみるまにもう
つるひにけり

御子左大納言家にて、寄野恋

1035 誰にかはうつろひぬらんあふことはとをさとを
のゝ秋萩の花

兵庫頭秀長会に、寄雲恋

1036 ことならは何なひくらんたちかへりまたへたて行
嶺の白雲

御子左大納言家三首に、名所恋

1037 今さらに浪こゆるともかこたれすうきいつはりの
末の松やま

冷泉院大納言、双輪寺尋おはして哥よまれし
に、絶後遇恋

1038 今更にくるもはかなき契かな空にたえにしさゝか
にのいと

民部卿一日百首に、寄忍草恋

1039 日にそへて人は軒はのしのふ草おもひもしらす何
しけるらん

御子左入道大納言家旬十首、寄霜恋

1040 さても猶霜やをくらんわすれ草しけりてかるゝ人

の心は

彈正親王家三首に、逢不遇恋

1041 こきかへるたなゝし小舟今更におなしあしまの何
さはるらん

宰相典侍哥合に、寄花恋

1042 うつり行心のはなのはては又色みゆるまてなりに
けるかな

前藤大納言家にて、変恋

1043 ことの葉もかはりにけりな色みえぬ心のはなもし
らるはかりに

御子左大納言家にて、遠恋

1044 夢にたにみえすといかてつけやらんうつ山のちは
あふ人もなし

寄弓恋

1045 うきなかはちきりあたちのしらま弓もとのつらさ
に又やかへらん

寄垣恋

1046 山かつのかきはのましはかりそめにみしよりやか

てへたてはてつゝ

御子左大納言家三首に、忍絶恋

1047 なからへはしのひかぬへき中とてや人しれぬまに
遠さかるらん

源中納言家にて、絶恋

1048 年もへぬさすかいまはとたのまるゝ後しも人の遠
さかるらん

藤原基任、新日吉社にて哥よみ侍しに、暁恋

1049 明わたる雲まのほしのさのみなとまれになり行契
なるらん

民部卿家十五首、月前絶恋

1050 今は身に涙のはるゝ隙もなし月もそのよそかきり
なりける

御子左大納言家にて、絶後顕恋

1051 むら雲のひま行月のはやくのみうつるは人のこゝ
ろなりけり

関白殿にて、恋天象

1052 さらてたになかめられつる大そらの月をかたみと
何ちきるらん

1053 御子左大納言家にて、絶後顕恋
ありはてぬ名をもらすこそ山水のたえしにまさる
つらさなりけれ

1054 同家十首に、面影恋
したひわひわかれしほとのおもかけのうきしもな
とか身にはそふらん

1055 契久恋
うきなかに何たのむらんむかしせしわかかねこと
の契はかりを

1056 右大臣殿五首に、契恋
かはらしとおもひしまてや行末の心もしらす契を
きけむ

1057 禅正尹親王家五首に、寄鏡恋
年月そめくりもあはてうつり行市のなかなる鏡な
らねは

1058 独吟百首に
さすかよもわすれしものをいにしへも人やはいひ
しよ、のかねこと
寄杣恋

1059 わすらるゝみおの杣木のうきふしをおもひしらす
はくれやまたまし

1060 民部卿家三十首に
おもひ出よつたのほそえをこく舟のゆきあふなか
は遠さかるとも

1061 建武二年内裏千首、恋雑物
くちのこるあしまの小舟いつまでかさはるにかこ
つ契なりけむ

1062 人々東山なる所にて哥よみ侍しに、寄山恋
今更にかはる心のつくはやまはやましけ山さそな
さはらん

1063 御子左大納言家十首に、違約恋
秋の霜かけけるまつもあるものをむすふ契の色か
はるらん

1064 後岡屋関白家にて、遇不会恋
恋しなてまつ身ともかなたちかへりとふもためし
のなき世ならねは

1065 左兵衛督家五首、契後隠恋
契しもかひこそなけれ雲のゐる遠山とりの行ゑし

らねは

1066 小蔵宰相中将よませられ侍し五首に、夢逢恋
いまこんといふたにかはるうき中に契りもをかぬ

夢にみゆらん

後宇多院宰相典侍三首哥合、絶恋

1067 今は身におもひたえぬる夕こそまたれしよりもな
かめあひぬれ

法印浄弁よませ侍し三首に、寄雲恋

1068 をのつからなひくとみればあともなしさてやはつ
せの山のはの雲

聖護院宮にて、稀逢恋

1069 いきてよにおなしつらさをなけ、とやわすれては
又おもひ出らん

前藤大納言家月次三首に、忍絶恋

1070 なからへぬ契の後そしられけるさのみつ、しみ人
のこゝろは

御子左大納言家三首、絶恋

1071 今はよもたちもかへらしとし年のつらさのはてそ
つゐに絶ぬる

民部少輔氏経家にて、絶恋

1072 わすれける心そつらきうきなからたえて有へき身
ともしらしを

寄思草恋

1073 日にそへて人はかれの、秋かせにおはなかもとの
草そつれなき

遇不会恋

1074 津の国のいくたのもりに宿からん秋かせ吹て後も
とふやと

等持院贈左大臣家にて、寄衣恋

1075 いまは又まとをにもあらてあま衣かけはなれぬる
すまのうらなみ

絶恋

1076 今そしるまちみしころのよなくもしたにはかは
る心なりけり

御子左入道大納言家旬十首、旧恋

1077 さりとともとおもひしこともむかしにてたのまぬな
かを忘かねつ、

独吟百首に

- 1078 をのつからあひみし比のならはしも中くつらき
ひとりねの床
- 1079 御子左大納言三首、契久恋
今は又おもひやたえむわすれしとちきらてつもる
月日なりせは
- 1080 源光政かもとにて、絶恋を
稀にたに人もこすゑの玉かつらたえぬものとは何
おもひけん
- 1081 契絶恋
契しはおもひ出やととふほとのとたよりたになく遠
さかりつ、
- 1082 金蓮寺十首哥合に
わすられん時をかきりとおもひしに猶つれなきは
うき命かな
- 1083 聖護院五十首に、絶恋
今はた、なけかむための命とやわすらるゝ身のつ
れなかるらん
- 1084 左衛門佐和義朝臣家にて、忍絶恋
うきなかはさのみしのふのたねよりや忘るゝ草も
- 1085 しけりそめけん
將軍家三首に、被忘恋
うき中にとてもしけらは忘れ草わか心にもたねを
まかはや
- 1086 光音寺僧正よませられし名所哥に
わすれ草しけるもしらす住よしの岸もやすると頼
ける哉
- 1087 誓恋
かつらきやくめのいはゝし神かけてちかひしなか
のいかてたえけん
- 1088 絶久恋
たちかへりおとろかさはやとしをへて又も心のか
はりもそする
- 1089 独吟百首に
おもひしにせめてもかはる契とやわすらるゝ身の
世に残るらん
- 1090 なけゝとやつらき命ののこるらん又あふこともた
のみなき世に
- 御子左大納言家三首に、契久恋

1091 今こんといひし契をたのむまにいくな月あり

あけの月

民部卿家三十首に、絶祈恋

1092 神かきのもりのしめなは絶にしをいまはたかけて

頼ころかな

絶恋

1093 たのまれぬちきりなからもなこりなくたえむ中と

は思やはせし

1094 今は又つらきはかりをおもひいて、われもわす

る、心ともかな

1095 を山田のひたのかけなは絶ぬるを何につけてかお

とろかさまし

1096 むかしにもかはらぬ夢のちきりかなはかなきもの

はうつ、なりけり

絶不知恋

1097 いづくにかおもひ出らんおなし世にあらはとはか

りいひしちきりを

民部卿家にて、恨絶恋

1098 とてもかくたえけるものをうたてなと思はかりも

うらみさりけん

忍恨恋

1099 けにかよふ心ならはとかこつかなさこそ人めのひ

まはなくとも

秀長月次会に、同心

1100 山かつのあしふく軒のくすかつら恨るほとひま

たにもなし

金蓮寺哥合に、恨恋

1101 いはぬをもせめてうらみのあまりとはしらしな人

のつらき心も

御子左大納言家旬十首、厭恋

1102 人を猶うらみやせましなへてよにうきをいとはぬ

ならひ成せは

寄海恋

1103 いせのうみのあまのかけなは人をのみうきに定て

えやは恨ん

応長比よみ侍し百首に

1104 何をた、おもはぬ人をうらむらん水にかくてふ数

ならぬ身に

1105 つもりてもおもひし後はことの葉のなきにつけて
も恨かねぬる

御子左大納言家にて、恨恋

1106 心なき身におもひなすつらさこそいと、恨みの数
をそへけれ

独吟百首

1107 いくたひかわれのみ人にまぐす原うらみもはてす
又したふらん

前藤大納言家にて、恨恋

1108 つらきをも恨へき身のほと、たに思はて人やつれ
なかるらん

1109 しら露の玉まくのへのまくすはら心をこめてうら
みかねつ、

1110 恨てもかひなきなかと知なからうきを心にえこそ
しのはね

互恨恋

1111 たかかたもよしなきさとのしるへかな煙くらへの
あまのもしほ火

右大臣家七首、恨絶恋

1112 あまのすむさとのけふりはたえにしをつらきしる
への何残るらん

独吟百首に、恨恋

1113 今は世になしともきかはおもひしれこれを限とう
らみけりとは

民部卿家老若哥合に

1114 人はた、心なき身になすものをうきをも何かおも
ひ知らん

草庵和歌集巻第九

雑哥

民部卿家一日千首哥に、天象

1115 くるとあくとなえすそてらす久かたの空に月日の
行めくりつ、

等持院贈左大臣家哥に、暁

1116 しつかなるね覚にぞ聞さと、をき鳥のはつねはさ
たかならねと

彈正尹親王家に哥よませられしに、関鶏

1117 関の戸に鳥のそらねのいにしへも猶いつはりのあ

るよなりけり

暁鶏

1118 鳥のねそまたおとろかすふかきよのねさめの、ち

の老の眠を

民部卿家百首に、海上暁雲

1119 山のはもみゆるはかりはあけやらてなるとのおき

にかゝる横雲

寿量院二品法親王家十首哥に、海上眺望

1120 あしのやのなたのしほちをこく舟の跡なき浪に雲

そかゝれる

海辺夕望を

1121 浪の上の入日にちかくなりけりおきにたゆたふ

あまの釣舟

従三位有範卿家の障子絵に、西湖十境をかきて

人々に詩哥をすゝめ侍しに、雲峯落照

1122 入日さすみねはのこりて夕暮の雲にそうつむをち

の山もと

民部卿家百首哥に、薄暮松風

1123 吹かせはいつともわかぬ松の葉にさすや夕日のか

けそさひしき

御子左大納言家にて、松を

1124 何ことをみきとかいはむ数ならてわか身いそちに

たけくまの松

民部卿家の一日百首に、名所松

1125 かくはかり心つくしのうきよにも猶つれなくやい

きの松原

谷松年久といふことを

1126 山ふかみ谷にはよその春ならて松はいくよのみと

りそふらん

二条入道大納言家にて、窓竹

1127 うき世には誰か友なる窓の竹心むなしき人もなけ

れは

侍従中納言、花の比和哥所寄人をさそひて蔡

花園にて哥よまれしに

1128 ひとすちにそれとも聞す松かせのひゝきもたえぬ

滝の白糸

熊野那智の滝にて

1129 山ふかみ雲よりおつるたきつせのあたりの雨はは

る、日もなし

後宇多院宰相典侍、ゆめにつけられけるとて、

土御門禪尼女為遠朝臣すゝめられし名所哥に、塩竈

浦

1130 しほかまのあまのすみかをきてみれば煙そうらに
名にも立ける

寂恵よませ侍し名所哥に、なるみかた

1131 時しらぬうき身ひとつやなるみかたしほのみちひ
はさためなきよに

修行し侍し時、いはしろのおきに、海士の
かつきするを見て

1132 かくて猶くるしき海にしつむとはおもひもしらす
かつくあま哉

左衛門佐和義朝臣家にて哥よみ侍しに、橋を

1133 ふりにけるなからのはしをみても猶しらぬ昔をこ
ひわたる哉

御子左大納言家旬十首に、都鳥

1134 あれはてしこれやなにはの都鳥いまもほりえの川
に鳴也

颯

1135 月は猶たかまと山の梢よりあかつきおつるむさゝ

ひの声

定海僧都、勸学障子つてに、比良湊かきたる所

1136 山かけのひらのみなとに舟とめて月まつほとに夜
は深にけり

浦松を

1137 志賀のうらや行きになれてみしよたに昔になりぬ
から崎の松

等持院贈左大臣家哥に、同心を

1138 ひくしほの遠さかりゆく浪の音を松にそわくるよ
さのうらかせ

海眺望

1139 あしやかた浪のいつくもあらはれて夕日にかへる
おきのつり舟

金蓮寺にて名所哥よみ侍しに、辰市

1140 たつた山夜はにこえけるほとみえてまた朝霧にた
つの市人

河尻にてしほゆあみ侍し時、やまひかきりに

1141 おほえ侍しかは、よめる
おもはすよなにはのあまのもしほ火によるは煙を
そへんものとは

周嗣、西行上人自筆の山家集をつたへて侍けるを、法勝寺僧坊の火のときやきて侍て後、また料紙のさまなともとのにかかへすかきて侍をみせ侍し、そのおくにかきつけ侍し

1142 けふりたにあとなきあまのもしほ草またかきをくを命とそみる

民部卿宰相中将と申せし比、住吉社絵にあらはして、名所のものにて硯文台などつくりて哥講せられし時、わかのうらの石にて硯つくりてをくり侍しつゝみかみに

1143 和哥のうらや心をかくるしらなみの岩にくたけておもふとはしれ

返し

1144 わかのうらや浪うつ岩のいはすともくたく心のほとはしりにき

前関白殿より百首御哥をみせられ侍しを、か

1145 へしまいらせし時、みまいらせたるよしを、おくにかきつくへきよしおほせこと侍しかはいせのうみのうらをつくしてたつぬともかゝる光の玉やなからん

後宇多院御時、もとよみたる百首哥をめして御覽せられて、御前にて披講せられ侍ける後、権僧正道我申をくられ侍し

1146 時しあれは玉の光もあらはれてかたへにこゆる和哥のうらなみ

返し

1147 何とたゝうかみいつらんわかのうらのなみの下草したにくちなて

兵庫頭長秀家にて、題をさくりて哥よみ侍しに、難波葦を

1148 よしあしに心はかけしつのくにのなにはおもはすやまとことの葉

堀川宰相定宗はしめておとつれしついでに

1149 ふみ分てまつそとはるゝしきしまのみちにふりぬる庭のよもきふ

- 1150 はま千とりふりぬる代々の跡はあれと猶みちたと
るわかのうらなみ
- 返し
- 1151 またしらぬよもきか庭の露分てとふことのはそを
き所なき
- 1152 ふみそむるみちこそたとれはま千鳥さすかによ、
の跡はまよはし
- 藤原基任、思のほかのことによりて、いなは
のくに、くたりて後、かしらおろしぬと聞て
申つかはし侍し
- 1153 そのまゝに忘れすしのふおもかけもかはると聞そ
さらになしき
- 正月のすゑ、ひらの山に雪のしろきをみて、
むかしこの山にて修学し侍しことをおもひ
て、
- 1154 山のはにのこれる雪をみても猶窓にあつめしよこ
そ忘れね
- おもひのゝち、志賀の山こえにて
- 1155 みしよりも猶ふるさとはあれはて、梢まれなる志
- かの花園
- 徳大寺前内大臣家にて、人々哥よまれしに、
古寺花を
- 1156 おく山のよかはのみねの花さかり八重たつ雲と猶
やみゆらん
- 橋辺花
- 1157 山人のあとみゆるまで谷川の草むすはしに花そふ
りしく
- 西行上人すみ侍ける双輪寺といふ所に、いほ
りむすひてよめる
- 1158 あとしめてみぬよのはるを忍ふかなそのきさらき
の花の下かけ
- 彼忌日にあたりて追善し侍し次に、人々哥よ
み侍しに、花を
- 1159 後の世をとほ、といひしそのまゝに山のさくらを
たとるけふ哉
- 花の哥中に
- 1160 さそひきて匂ひは花になりぬとも色にな出そ春の
山風

1161 まちおしむ心をさのみつくすかなうき世や花の色
となるらん

秋哥中に

1162 心なき萩のうは、にならふなよ物おもふそての秋
のはつかせ

1163 よを残す老のね覚のまくらより曉露やむすひそむ
らん

贈左大臣家五十首哥に、秋風

1164 をく露もなみたもろし世中のうけくに秋の萩の
上風

建武二年内裏千首哥に、秋動物

1165 あきかせの日ことにふけはさをしかのつま、ち侘
ぬ夕暮もなし

夜鹿

1166 つまこひの心しられてをくら山よるこそまたれさ
をしかの声

河霧

1167 川かせのなみにふきしく秋きりにうきてそくたる
うちの柴舟

御子左入道大納言家九月十三夜十三首に、対

月思昔

1168 老となるかけはうけれと月のみそわすられぬよの
かたみなりける

秋比はしめて仁和寺庵室にうつりて

1169 山里に月のころしもすみそめてやかて心のとまり
ぬる哉

名ある琵琶のむかしつねに見侍しか、この道
すてて後、つたはり来て侍し時よめる

1170 おもかけものこらぬものをいかにしてなかはの月
のめぐりにけん

民部卿家八月十五夜に、月前虫

1171 むしのねも草むらことにあらはれてくまなくすめ
る月のかけ哉

秋のすゑにむかしのこゑをきゝて

1172 朝日さすのへの草ねに聞ゆなり夜さむの霜によは
るむしのね

山つとにもみちをそへて、相模守もとにをく
りて侍しに、返ことに

1173 色く／＼の木々のもみちに心さしふかくそめてしほ

とはみえけり

返し

1174 もみち葉によもあらはれし露霜もをよはぬほとに

深き心を

民部卿家三十首哥に

1175 をしねほす田のもの日かけはれくもり時雨にく

る、秋の空哉

前坊かくれさせ給ふし(マ)のち、六条中納言よを

のかれて一切経谷にすまれ侍しに、神無月の

比たつねまかりて哥よみ侍しに、庭落葉を

1176 庭のおもによもの木葉をさそひきて色のちくさに

山風ぞ吹

河水を

1177 冬寒き氷そはやきたえく／＼に岩まもりこし山かは

の水

水鳥

1178 池水のこほりのひまにうちはふきよるなくをしの

声の寒けさ

十月比梅花のさきたるにつけて、彈正少弼頼

遠もとに申侍し

1179 神な月おもひかけぬにさく梅はしくれにまじる雪

かとぞみる

雪のあした前関白殿より

1180 心さへ猶はれかたし君とはてつもれることの庭の

しら雪

御返し

1181 かくはかりふかきなさけはしら露のふりぬるよに

も跡やなからん

歳暮の心を

1182 人をわくうき世になとか老か身をくれ行としのも

らさゝるらん

真宗院兼空上人をとつれ侍つゐてに

1183 まれにみし人めもいまはむかしにて野となりはつ

るふか草のさと

返し

1184 深草のさとは野原とあれぬともすみこし代々の跡

はたつねん

晩鐘を

1185 くれぬとはおもふものからいつとた、おとろかて
聞かねのをとかな

民部卿家千首に、浄侶夕帰

1186 しつみ^きつむ山ちくれぬといそくかなわかすむかた
のかねのひゝきに

世中しつかならず侍しころ、みむろとの庵室に

1187 さひしさはしのひこそせめいとひきてよをうち山
のみねの松かせ

金蓮寺十首哥合に、山家

1188 さひしさはおもひしまゝの宿なから猶きゝわふる
軒のまつ風

御子左入道大納言家にて、山家松

1189 わかいほは宮こをとをみ人もこていたつらにふく
軒のまつかせ

聖護院五十首に、山家嵐

1190 世中のうきをしのはてすてしかと松のあらしはた
へてこそきけ

嶺松を

1191 年をへてなるゝはかりそさひしさは今もかはらぬ

みねのまつかせ

大膳大夫頼康家にて、山家松

1192 松かせのしつかならぬそいとひ入み山のいほのう
き世なりける

山家嵐

1193 たへてすむかひこそなけれさひしさの心にあまる
みねの松かせ

金蓮寺にて哥よみ侍しに、山家

1194 山かけのわかかくれかそとしへぬるいはるゝ人は
すみやかふらん

同心を

1195 友もなきみ山のおくになかめてそ世は出かたきも
のとしりぬる

1196 たつねこむ人をそいとふ世中をいとふしるしの杉
たてるかと

1197 しはしこそ世のうきよりとしのふともゆくすゑし
らぬ山のおく哉

山家路

1198 山かけのかよひちあともなしいとふやかたきうき^{本ノマ}

世なるらん

1199 われはかりたちいてゝとるおくやまのつま木のみ
ちは残るともなし

御子左大納言家哥に、山家水

1200 手にむすふ岩かきしみつすみなれて猶山かけはあ
かすもある哉

民部卿家一日千首に、山家籠

1201 さをしかの跡たにのこれをのつから山ち絶すは人
もこそとへ

二条入道大納言にて、山家述懐

1202 猶ふかき山のおくにとおもふこそかくてもすてぬ
心なりけれ

仁和寺庵室にてよめる

1203 よのうさをそへて聞こそなかしけれ都にちかき山
のあらしに

三宝院僧正坊にて、山家月を

1204 なかむれはこれもこゝろのとまるかな月やみ山の
うき夜なるらん

御子左大納言家四季百首に

1205 さひしさをしのひやかねん山ふかみ世をうきもの
とおもひはてすは

人々北白川さる所にて十首哥講せられしに、

山家夕嵐

1206 山さとに松のあらしはなれぬるを又いまさらにう
きゆふへかな

東山のおくに、柴のいほりのみゆる所にたつ
ねまかり侍しに、人はなくてちいさきことを
たてゝ侍しかは、そのをにむすひつけ侍し

1207 いまそしる山のおくにもまつかせのこゑともにて
人はすみけり^{をイ}

山家松

1208 山ふかみまつはむかしのともならてなれ行かせの
をとそさひしき

1209 松かせのふくをもしらすうきことのきこえぬかた
と尋ける哉

1210 たつねきてうきをのかるゝこのもともすみかとす
れは松かせそ吹

民部卿家十首に、松風

1211 まつかせもたえすさひしき山さをとほれぬのみ
とおもひける哉

庵室の庭の松を仙洞にうつされし時、むすひ
付侍し

1212 友ときく松のあらしもとせすは猶山さとやさひ
しからまし

御返し、ほとへて庵室の軒の木の枝にむすひ
つけられ侍し

1213 さひしさをおもひこそしれ山さとの友とき、ける
松のあらしに

山家送年といふことを

1214 さひしさを老となるまでしのひきぬいまはみ山に
すみやいてまし

法印玄忠哥よみ侍しに、山家眺望

1215 柴の戸になかむるかたのなかりせは猶やさひしき
すまひならまし

法眼兼誉よませ侍し哥に、述懷

1216 のかれきてすむ山かけのなかりせは何を浮よのな

くさめにせん

住吉社百首哥合に、山家

1217 をのつからまた身をかくす人にたにすむとしられ
ぬ山のおくかな

御子左大納言家にて、同心を

1218 さひしさにたえてすむ身と山さとはとしふるま、
にとふ人もなし

寂恵よませ侍し哥合に、山家松老

1219 山ふかみたかすみわひし跡ならん老木にのこる庭
のまつかせ

寂真西国にくたり侍し時、錢別に人々哥よみ
侍しに、山家を

1220 かくてこそしつかなりけれ山さとのすみよきほと
を人にしられて

贈左大臣家千首に、草

1221 山さとにむくらのとさしさくてけり猶やうき身の
出かてにすむ

前関白殿にて、雑植物を

1222 さくこもるむくらの宿は中くにおもひなくてや

世をすくすらん

聖護院宮五十首に、田家水

1223 わか門のいた井の水やあまるらんかり田のおも、
みくさゐにけり

入道前太政大臣家哥に、田家

1224 を山田の庵のさゝふき露寒みなれていくよをもち
あかすらん

田里を

1225 山かつのもとすむやとも門田もるさゝのかりほに
かはりやはする

民部卿家一日百首に、田家煙

1226 はるかなる小田のかりほの夕けふりたかをくかひ
のよそにみゆらん

御子左大納言家四季百首に

1227 小山田のひたのかけなは何とたゝかりのこのよに
心ひくらむ

寄情述懐といふことを

1228 ことのほのなさをなをそすてやらぬかきこもる
へき草のとさしに

贈左大臣家五首に、述懐

1229 あはれとも聞人あらは和哥のうらのあしへのたつ
にねをやそへまし

同心を

1230 和哥のうらにおひてかたふく松かねのうつもれぬ
名を思ふはかなさ

新千載集えらはれ侍し時、いたし侍し哥を、
彈正宮により御覧すへきよし、おほせこと侍

しほとに、まいらせたりしを、返給し時つ、
みかみに

1231 みかきけるこの玉のみそ和哥のうらのむかしをう
つす光とはみる

御返し

1232 老のなみたちかさねにし和哥のうらのもくつはい
とゝ玉もましらし

白氏文集余年七十一不事於吟哦といへること
をおもひいて、

1233 いまは我心もよせしなゝそちにこえぬる後のわか
のうらなみ

御子左大納言家にて、寄身述懷

1234 和哥のうらや名をかくるよにあふこともつもれは
老のなみとこそなれ

聖護院五十首に、述懷

1235 世をうしとおもふはかりそ数ならぬわか身も人に
かはらさりける

三宝院僧正坊にて、おなし心を

1236 いつはりのあるならひにや人ことにそむかれぬよ
をうしといふらん

刑部少輔大江広房題をさくりて哥合し侍しに

1237 いつまてとおもはさりせは世の中のうきになくさ
むかたやなからん

応長ころ、よみ侍し百首に

1238 とにかくにうき身を猶もなけくこそすてしにたか
ふ心なりけれ

述懷の哥あまたよみ侍し中に

1239 しはしたに身をおく山のかくれかを老の心になを
いそくかな

1240 としもへぬいま一しほとおもひしも心にくつるす

みそめのそて

1241 世の中のうきをならひとおもふよりなか／＼山の
おくもたつねす

人々題をさくりて哥よみ侍しに、寄木述懷

1242 あらきかせふせくたよりをいか、せむ老木のはら
そくちはてぬまに

彈正尹親王家にて、述懷

1243 うき身とは何なけくらん数ならてふるこそやすき
この世なりけれ

暁述懷

1244 おもひこし身のあらましのはかなさもわか世ふけ
ゆくね覚にそしる

御子左大納言家にて、暁寢覚

1245 おとろかすわが身のとかもおもひしるね覚はしは
しあけすもあらなん

寄雲述懷

1246 ことかたにまたもうつらす紫の雲のむかへにかけ
し心を

金蓮寺にて、述懷涙といふことを

- 1247 老ぬれは何ゆへおつるなみたともわれさへしらて
ぬる、袖かな
老後述懐
- 1248 すてしよりおしからぬ身のいかにして老となるま
てつれなかるらん
長秀家にて、同心を
- 1249 限あれは身のうきこともなけかれす老をそ人はま
つへかりける
御子左大納言家にて、寄世懷旧
- 1250 むかしとておなしうきよをしのふかなとしのおい
ぬをおもひいたして
述懐
- 1251 七十のけふまでのこるわか身こそさためなき世の
あまり也けれ
人はみな遠さかり行老らくの身にそふものはなみ
たなりけり
前関白殿、題をさくりて哥よませられしに、
寄涙述懐
- 1253 むかしにもかはらぬものは心にてなみたそ老のし
- 1254 るしなりける
勝如来て哥よみ侍しに、懷旧
夢よりもはかなくすきしとし月のいかてか老のか
すとなるらん
同心を
- 1255 かくはかり袖やはぬれむおもひてのあるのみしの
ふむかしなりせは
御子左入道大納言家十首に、夢
- 1256 すくしてしむかしを又もみつる哉つねなるものは
夢ちなりけり
独懷旧
- 1257 かくまでもなくさむはかり老か身の忍むかしをし
る人もなし
金蓮寺歌合、懷旧
- 1258 つたへきくむかしをとをく忍ふ哉わかみし世には
おもひ出やなき
同心を
- 1259 こしかたをおもひいてすはしはしたに何にか老の
うきをわすれん

御子左入道大納言家にて、寄夢懷旧といふこ
とを

1260 こしかたを又もみよとてむは玉の夢てふものはあ
る世なりけり

草庵和歌集卷第十

羈旅

関路旅を

1261 相坂の関こゆるよりやかてはや都の山そみえすな
りゆく

前太政大臣家にて、朝旅行

1262 あふさかのとりのね遠くなりけり朝露わくるあ
はつの、原

独吟百首に

1263 行まゝにはや遠さかるふる郷の山さへいまは雲か
くれつゝ

御子左大納言家四季百首に

1264 さとゝはむかたもしられす霧こめてさやかにみ
えすさやの中山

金蓮寺にて名所哥よみ侍しに、富士山

1265 たこのうらはまたはるかなるあつまちにけふより
ふしのたかねをそみる

陸奥守顯氏家にて、旅行を

1266 あつまちそおもへはとをきふしのねのふもとにき
ても日かすへにけり

大膳大夫頼康家にて哥よみ侍しに、羈中眺望

1267 宮こにてまつやかたらんおほそらのなかはにみゆ
るふしのみ雪を

浦松

1268 清見かた関こえすくる旅人も心をとめてみほのう
らまつ

等持院贈左大臣家三首、旅行

1269 くれにけりつたの下露分すきてをかへにかゝるう
つの山みち

聖護院二品親王家五十首に

1270 立かへりいつこえむともしら雲のたなひく山をか
さねてそ行

山夕旅を

- 1271 岩ねふみかさなる山に日はくれて宿こそなければ
ねのしら雲
- 1272 青蓮院二品親王家にて、同心を
しら雲のくるれはかへるみねをたに猶分すて、ゆ
く山ちかな
- 1273 修行し侍し時、かつらきの山をこゆるとて
かつらきの山ちをこえてけふみれは宮こそよその
雲ゐなりける
- 1274 善光寺にまうて侍し時、九月十三夜をはすて
山の月をみて
こよひしもをはすて山になかむれはたくひなきま
てすめる月哉
- 1275 秋旅を
鴈のくるあさけのきりに峯こえておもひつきせぬ
たひのそらかな
- 1276 草枕おきいて、みれは鴈なきてさむきあさけの月
そ残れる
- 1277 御子左大納言家十三首に、月夜旅行
むさしのや月をかきりに分ゆかはあけてや草のま
- 1278 九月つこもりの日、武蔵野をすくとして
むさしのや猶行末のとをければ秋はけふこそかき
りなりけれ
- 1279 拾遺詞を題にて哥よみ侍しに、けふ行すゑに
旅ころもしくる、山をかさねきてけふ行末につも
るしら雪
- 1280 民部卿家一日千首に、旅
ふるさとかへりこん日をおもはすはたひ行みち
をいそかさらまし
- 1281 河辺旅を
行やらてこ、にやしはしすみた川宮こそ鳥の名に
しのひつ、
- 1282 高野にのほり侍し時
名もしらぬみ山の鳥の声はしてあふ人もなしまき
の下露
- 1283 旅行
つたへきくそなたとみゆる山もなし雲のいつくか
ふるさとの空

応長のころよみ侍し百首に

1284 秋かせのよさむの月をなかむとも宮こにたれかし

らかはの関

旅宿

1285 あふさかの関こえしより聞そめてたひねになる、

鳥の声哉

頼康よませ侍し三首に、同心を

1286 都にもこよひのやとをいつくとは日かすかそへて

おもひいつらん

等持院贈左大臣家にて哥よみ侍しに、鞆中花

1287 とまるへきふものとのはちかくとも山ちの花に

宿やからまし

旅宿夢

1288 草まくらおもふことゝてふる郷のたひねの夢にみ

えぬよそなき

1289 古郷のみえつる夢のなこりとて草のまくらそおき

うかりける

1290 よなくゝにむすふは草のまくらにてたひねの夢は
みるとしもなし

金蓮寺にて、侍従中納言哥よまれしとき、鞆

中鶏

1291 とりのねはいつくなるらん草まくらさと、ひかね

てあかすかりかね

鞆旅を

1292 草まくらおもかけさらぬ古郷の夢ちになにとを

さかるらん

夕旅

1293 入日さすをかへのさとをとひすて、雲のゆふるる

みねやこえまし

寂恵よませ侍し五首に、鞆中述懐

1294 世中をよしやなけかし分行は野にも山にも人はす

みけり

湖辺旅

1295 駒なめて打出のはまのまさこちにまつほとをそし

にほのうら舟

日野大納言家にて、海路を

1296 こき出ていくかになりぬ行すゑもなみの千さとの
八重の塩かせ

- 1297 浪の上の月をのこしてなにはえのあし分を舟こき
やわかれん
三條中納言実任藤原基任など、河しりのゆあみ
侍し時、前大納言人々さそひて、難波の月み
にくたりて、暁のほられ侍しとき
- 1298 こきいつるあし分を舟なとか又なこりをとめてさ
はりたにせぬ
返し
前藤大納言
- 1299 浪のうへの月のこらすはなにはえのあし分小舟な
をやさはらん
富小路大納言
- 1300 在明の月より外にのこしをきてあし分をふね友を
しそ思ふ
宰相中将為藤
- 1301 なにはえのあし分小舟しはしたにさはらは猶も月
はみえまし
左中将為定
- 1302 一夜たにあかしもはてすみなと舟月のてしほにこ
金蓮寺哥合に、旅泊
- 1303 古郷の夢やはみえんかりまくらいかにぬる夜もう
らかせそふく
同心を
御子左大納言、東山なる所にて哥よまれしに、
- 1304 なにはかたかせまつほとうきねしてあしまのな
みの音そなれぬる
蓮智宇都宮
遠江入道家にて、泊舟を
- 1305 なにはかたこやのかりねの夢にたに都をいかてみ
つのうらかせ
閼伽井宮にて、旅の哥に
- 1306 あしの葉によるの雨聞みなど江のなみのまくらを
いかてあかさ
民部卿家に、題をさくりて哥よまれしに、旅
泊雨
- 1307 おきつかせふくにまかせて行舟はなみのよるとて
とまりやはする
縫殿頭高広家にて、海路を
不断光寺にて哥よみ侍しに、同心を

1308 こしかたの山はのこらぬなみちにも猶ふるさとの
おもかけそたつ

右大臣殿にて、海旅

1309 わたのはら雲のいつくをとまりともしらぬなみち
にこきそくれぬる

將軍家にて、月前旅泊

1310 浪まよりいてける月を舟とめて山のはみゆるかた
にまつかな

金蓮寺五首、旅宿を

1311 きさかたのあまのとまやのかりまくら一夜もまた
や夢になりなん

哀傷

無常の心を

1312 あすか、はかはるふちせに行水のつねなきことそ
たえすありける

1313 身のよそにいつまでき、てあたしの、露も雫も袖
ぬらさまし

五月五日、左中將為道朝臣遠忌結縁経の哥次に、
夏懷旧といふことを

1314 いにしへをしのふたもとにけふかけて五月の玉も
なみたなりけり

贈従三位為子のいみにこもりて侍し比、月をみ

て

1315 なかつきのありあけの月そやとりけるとまらぬか
けを歎袂に

おなしころ、蟬のもぬけたるあさかほの花に
つけて、御子左大納言時少將に申侍し

1316 うつせみのよのはかなさをおもふには猶あたなら
ぬ朝かほの花

返し

1317 空蟬はむなしきからものこりけりきて跡なき朝
かほの露

おなし人除服の次の朝申侍し

1318 ぬきすつるなこりのほとをおもふにも苔のたもと
そよそにしほれし

返し

1319 藤ころもなみたなからもかへしかとけふのたもと
もかはらさりけり

いみの日かすすきて人々かへられし後、母儀
於京極旧跡にのこられ侍るよしきゝて、民部
卿干時宰相
中将のもとへ申侍し

1320 うたかたのきえにし跡もいまさらにむせひやまさ
る中川の水

1321 先師仁譽法印、弘法寺旧跡にまかりて
古郷のよゝのおもかけおもひいてゝそゝろにそて
のぬるゝけふかな

あか井の宮かくれさせ給て、御いみのはてか
たに女房中に申侍し

1322 うつり行月日をせめておしむかなとまらぬかけを
したふあまりに

御返し

1323 なけきあまりおもひきえてはうつり行月日をおし
む心たになし

飛鳥井宰相雅有卿卅三年に、後宇多院宰相典侍
結縁経哥すゝめられし次に、懷旧を

1324 ことのほの世にのこらすはかくはかりしるもしら
ぬもしのはさらまし

後宇多院崩御の後、いくほとなくて民部卿か
くれられ侍し比、僧正道我、一かたをなけくた
にこそかなしけれ思はしるやそてのなみたを、

と申侍し返しに

1325 いはぬよりおもひこそやれとにかくに一かたなら
すぬるゝたもとを

昭慶門院少将身まかりし比、永陽門院左京大
夫、あはれともいふへき人はさきたちてのこ
る命そありてかひなき、と申て侍し返しに

1326 なけくらん老の心をなき跡のあはれにそへておも
ひこそやれ

母のおもひにて侍しころ、兼好哥をすゝめ侍
し返しに

1327 おもへたゝつねなきかせにさそはれてなけきのも
とはことのなもなし

惟宗光吉朝臣母身まかり侍しを、をそくとふ
らひ侍しころ、雪朝、さためなき世ともしら
てや白雪のつもる日かすをとひこさるらん、
と申て侍し返しに

1328 とはぬまもおもひこそやれかきくらしなけ、とは
れぬ宿の白雪 きもイ

1329 民部卿かくれ給ひし後は、このみちのこと一
すちにおもひすて侍しを、猶二条前大納言家
の哥の会とて侍しかは、まかりいつとて
もしほ草かくもはかなし和哥のうらの舟なかつた
るあまのしわさに

1330 八月十五日うせにし人の忌日にめぐりあひて
人のよのなかき別をいか、せむかすみていにし鴈
はきにけり

1331 名にたかき月をもめてしこれそこれうかりし秋の
なかはなりける

1332 なき人を月あかき夜をくり侍しことをおもひ
出て

とりへ山けふりもえたつそのよしもさやかにみえ
し月もうらめし

法印淨弁身まかりて又のとし、仏事などに結
縁すへきよしおもひなから、ありまの湯あみ
にくたりて一周忌の、ち、かへりて慶運法印

1333 もとに申侍し
かきりあるみちこそあらめ廻りあふ日かすにたに
もをくれぬるかな

1334 返し
日かすにもをくると何かなけくらんめぐりあふこ
そなみたなりしか

雪ふる日、母のはかにまかりて

1335 おもひやる苔のした、にかなしきにふかくも雪の
猶うつむかな

1336 白雪のふりぬるわか身いつまでかのこりて人のあ
とをとほまし

弟子の墓に、雪の朝まかりて

1337 わかあともとふへき人をさきたて、山ちの雪をわ
くるかなしき

法印玄恵身まかりて後、入道左兵衛督経料紙
のためによませられし二首に、哀傷

1338 なき跡をとほる、までも残けり窓にあつめし雪の
ひかりは

極楽院に陵阿上人うへをきたる桜をみて

1339 みるたひにそてこそぬるれさくら花なみたのたね
をうへやをきけん

1340 身まかりにし人の七年にあたりて、八月の比
そのまゝに露をくそてはかはかぬにはや七とせの
秋もへにけり

入道大納言十三年に御子左大納言結縁経哥
すゝめられしついでに、懷旧を

1341 和哥のうらの浪まの千とりもろ声に心をよせてあ
としたふなり

参河守高宗身まかりて後、其跡にて人々哥よ
み侍しに

1342 けふは猶あらましかはと忍ふかなはらぬ文をみ
るにつけても

三宝院前大僧正賢俊、追善の光明真言の料紙
のために哥すゝめ侍し時、懷旧を

1343 はかなくて消にしをのゝ朝露にけふまで袖を何し
ほるらん

祝部行氏宿祢卅三年にあたりて、行親宿祢仏
事いとなむよし聞て、捧物に銀劔つかはし侍

1344 とて
袖は猶露こそむすへ秋の霜ふりはてにける別とお
もふに

返し

1345 おもはすよふりにし跡の秋の霜心にかけてなをと
はむとは

等持院贈左大臣家かくれさせ給て後よめる

1346 わかのうらのなみかけころもなれくゝてをくるゝ
袖のほすひまもなし

1347 時しもあれ花たちはなにしのふ哉さ月もまたぬ人
のむかしを

1348 ねにたてゝなけくはなにそうつせみのむなしき世
とはしらぬ物かは

おなしころゝ七月七日としくゝの哥合なと思
出て

1349 天川わたるとなしに秋ことのけふをおもへはぬ
るゝそてかな

九月十三夜雨ふり侍しに、故將軍明月のくも
ることをかきりなく念なきことにおほせられ

1350

しことを、おもひいて、
おほ空の月やしるらんこよひとてくもるをなけく
人もなき世を

1351

縫殿頭貞重、子息長貞にをくれ侍しころ、八
月十五夜に、月かけのはる、こよひもわか袖
のおなしなみたになとくもるらん、と申て侍
し返ことに
よそまでもなみたにくもる月かけを心のやみをお
もひこそやれ

1352

民部卿、勅撰をうけ給はりなから、奏覧をと
けすしてかくれられ侍しに、延文元年七月、
三十三年にあたりて侍しころしも、新千載の
こと仰くたされ侍しかは、仏事の次に、人々
哥よみ侍しに、懐旧の心を
と、めをく跡をもしらて友千鳥いかなるかたのう
らにすむらん

釈教

前関白殿にて題をさくりて哥よませられしに、
釈教

1353

人をわくをしへならてや法のみちあまたのかとを
ひらきをきけん

1354

大日を
物ことにあまねくてらすことはりやはしめていて
ぬ日かけなるらん

1355

尺迦
よにいて、月のみかけをてらすかなこれやむかし
の雪の山人

1356

御子左大納言家に、四季百首哥よみ侍しに、
尺教中に、人界
立かへりいか、しつめむいせの海につりするあま
のうけかたき身を

1357

声聞
なかきよの夢のまぐらはさめにけり鹿のそのふの
秋の嵐に

1358

縁覚
おく山になかむる月のはれにけり木葉をさそふ風
にまかせて

菩薩

- 1359 残なく人をわたすとせしほとにわか身はもとの
まゝのつきはし
- 1360 最勝王経、薩捶王子の因縁を見て
つたへ聞袖さへ露にぬるゝかな竹のはやしにかけ
しころもは
- 1361 法花経提婆品経、於千歳為於法故
爪木とる谷の小松もふりにけり法のためにとつか
へこしまに
- 1362 寿量品
むかしより玉のをなかくとく法にむすふいくよの
契なるらん
- 1363 民部卿家山王講哥に、嚴王品
しるへして又このもとにさそひしやおなし山ちの
契なるらん
- 1364 勧発品、植衆徳本
まれにあふ御法の花の色みてそうへけむよゝのた
ねもしらるゝ
- 1365 雲消てみとりにはるゝ空みれは色こそやかてむな
しかりけれ
- 1366 入道大納言十三廻に、御子左大納言結縁経の
哥すゝめられしに、心経不増不減
かはらしなむなしき空の夕つくよまた有明にうつ
り行とも
- 1367 吉田前内大臣家すゝめられし同経の真実不虛
色も香もなへてむなしととく法の言の葉のみそま
ことなりける
- 1368 一切衆生悉有仏性
ことはりはもにすむ虫もへたてぬをわれからまと
ふ心なりけり
- 1369 二条大納言、正和比春日社にて唯識論哥講せ
られ侍しに、非実接故如空花等
いつよりかむなしき空にちる花のあたなる色にま
よひそめけん
- 1370 比叡山の中堂にまうてゝおもひつゝける
うき身とも今はなけかしとく法にあふはあたる
契ならねは
- 左兵衛督三条日吉に奉納せられし一品経哥に、
般若心経、色不異空ゝ不異色

春日社神木宮こに遷座の比、二条入道大納言
家に諸神名号の一字をわかつて哥よませられ
しに、留の字をはしめにきて、山家水を

1371 瑠璃のちにかけみむまてとおもふかな山水にす
ます心は

阿弥陀経、諸宝行樹及宝羅網出、微妙音辟如
百千種樂同時俱作

1372 今そきく松ふくかせの音ならて木すゑにことのし
らへ有とは

宝池をよめる

1373 はちすさくたからの池にこく舟のまつおもかけに
うかひぬる哉

十樂哥中に、身相神通樂

1374 くもりなくたか心をもてらすかなわか身にそへる
光のみかは

五妙境界樂

1375 風かほるたまのとはそを花とりの色ねにつけて思
こそやれ

庭に菊をおほくうへて、むらさきの雲とそみ

ゆるしらきくの霜にうつろふ庭のけしきは、
とよみ侍し人、紫雲たなひきおもひのまゝに
をはり侍しことをおもひいて、

1376 つるに又にしにそうつるそめをきし心のすゑの紫
の雲

如法経かき侍し時、懺法悲歎声を聞て

1377 ひはらふくかせならねとも杉のほらかなしむこゑ
の名残をそ聞

良恵上人経空入滅後、四十九日なとすきてお
もひつゝ侍し

1378 いまははやゝとるはちすのひらくらん別し後も日
数へぬれば

浄土三部経かきて、舞樂にて供養し侍しに、

源中納言具行卿いまた少将と申侍し比、陵王を
まはれ侍しかは、又日申侍し

1379 山のはの入日をかへすたもとにもにしに心をかく
るとそみし

返し

1380 山のはのいり日をいかてかへしけん我たににしに

いそくこゝろを

仏舍利をおかみて

1381 よを照す光をいまま残すかな鶴の林の花の下露

九月十三夜の比、法念仏ををこなひ侍しに、

暁かた民部卿家より

1382 こよひしもにしにといそく心にてかたふく月やお

しまさるらん

返し

1383 こよひなをかたふく月のおしけれはにしに心をを

くるとをしれ

当摩の曼陀羅をおかみて

1384 これやこのにしこそ秋も山姫のよのまにおれる錦

なるらん

神祇

奇鏡神祇

1385 さかきはにかゝみをかけしむかしよりいくよろつ

よのうつりきぬらん

建武の比、等持院贈左大臣家に、奇花神祇と

いふことをよまれしに

1386 おとこ山はなのしらゆふかけてよりかけなひくへ

き君か春とて

神祇哥中に

1387 そのかみもいく代になりぬ神山のふもとにちかき

かものみつかり

御子左大納言家、貞和年二月に月次会始に、

神祇を

1388 春日山けふきさらきのはつはるにまつるも君かよ

ろつよのため

右大臣殿にて、神祇

1389 あめの下君かおさめんときをこそさしてみかさの

神はまつらめ

民部卿家一日百首に、神祇

1390 しるへする日よしのかけのなかりせは猶やうきよ

のやみにまよはむ

日吉聖真子社にまうて、本地のことをおも

ひいて、

1391 たのめた、てらしてすてぬ光こそ今もひよしとあ

らはれにけれ

神祇

1392 おほそらのほしの位もひとつにて君をそまもる七の神かき

貞和のころ、日吉社にこもりてよみ侍し哥の中に

1393 あはれとや日よしの神のみしめなはかけはなれてもひく心かな

延文元年、日吉の祭、洪水によりて舟にて神幸のよし、行親宿祢申侍しかは、影向のはしめをおもひいて、申つかはし侍し

1394 舟よせしまれの御幸にから崎のむかしを神やおもひいてけん

返し 行親宿祢

1395 ことし又御舟をよせてからさきの松に神よの昔をそ見し

日吉社にて三首哥合し侍しに、神祇

1396 おもひとけは日よしのかけをたのみしも西に入へき契なりけり

等持院贈左大臣家に、住吉社をつくりて哥講

せられしに、神祇

1397 住吉の神の宮ををうらなみのおもかけなからうつすやとかな

おなしき家の住吉三首哥、神祇

1398 かねてよりわか君か代のなかをかに跡をやたれし住よしの神

二条入道大納言家、続千載集奏覧の後、住吉社にまうて、五首講せられしに、秋神祇

1399 この秋そ神のいかきにはふくすのむかしにかへるみちはみえける

おなしく玉津嶋社にて、言忠一首を講せられしに

1400 いまそしる和哥のうらなみうき身にもかけたる神のめくみなりとは

神祇

1401 すみよしの神のしめなはすなをなるみちにはさそな心ひくらん

入道左兵衛督家三嶋社奉納せられし哥に

1402 いにしへのなはしろ水のためしあれはこのたむけ

にや心ひくらん

寄道祝を

1403 人ことにみちをそみかく玉つしま玉ひろふへき時

やきぬらん

有馬湯にて、社頭杉といふことを

1404 跡たれていつよりこゝにありまやま杉をしるしの

みわの神かき

鴨祐夏すゝめ侍し貴布祢社の三首、神祇

1405 名にしおはゝくるしき海をわたせとやさしてきふ

ねの神に祈らん

近衛前関白殿北野三首に、祝

1406 いく千世の春をかけてか契らん北のゝ松に北の藤

なみ

贈左大臣家北野法樂千首に、草を

1407 さそなけに神もうくらんうき草のたむけにかふる

やまとことのは

おなし家によませられし北野社五首に、神祇

1408 松かえの木のまにみゆる神かきやかせと月とのあ
るしなるらん

おなしき社三首に、神祇

1409 のに^(ママ)みえぬ神にたむけはあはれともおもふはかり
のことはもかな

寄神述懷

1410 すつる身を猶こそいのれたつね入まことのみちも

神にまかせて

賀

寄鏡祝を

1411 いにしへの三のかゝみもわか君のくもらぬ世にや

猶みかくらん

前藤大納言家月次三首、子日祝

1412 ねのひして引つる野への松かねにかねて千とせも

あらはれにけり

等持院贈左大臣家にて、松色春久といふことを

1413 いく千よかやとは柳の名にふりて松もみとりの色

をそへまし

同家にて、竹不改色

1414 春をしるまかきの竹の朝露に千世もかはらぬ色や
そむらん

青蓮院二品法親王家、花契多春といふことを
講せられしに

1415 色かへぬそのふの竹をいくちよの友とか花も契を
くらん

元亨二年三月、中務卿親王、法花山寺花御覽
せられし時、人々まいりて哥よまれしに、寄

花祝

1416 吹かせもおさまれる世のめくみには花の心そまつ
ひらけゝる

和哥所三首、寄道祝

1417 かくて又ふるきにかへれわか君のめくみをよもに
しきしまの道

続千載奏覧の、ち、和哥所にて人々哥よまれ
しに、寄道祝

1418 しきしまのみちもたえせし君か代につきて千とせ
の跡そ残れる

贈左大臣家に、月次哥会はしめられて、庭上
鶴といふことを講せられしに

1419 和哥のうらのあしへのたつもいく千世かかよひて

すまむ宿の池水

梶井法親王家にて、鶴

1420 わかのうらにこよひむれゐるともつるの契は千よ
もたえしと思

和哥所会に、鶴契週年

1421 行末も猶そはるけき和哥のうらに代々をかさねし
鶴の毛衣

三宝院僧正、房泉屋つくりて哥よみ侍しに、
祝のこゝろを

1422 せきいれてちよを心にまかせつるやと、はしるし
松の下水

人々題さくりて哥よみ侍しに、寄浦祝

1423 たつなみものとかなる世になりにけりはや玉ひろ
へ和哥のうら人

御子左大納言家にて

1424 和哥のうらやあしへはるかにみつしほの猶いやま
しにみちそかへらん

前太政大臣家に、松知春といふことを講せら
れしに

1425 君すめはいつも春なるやとなれと色そふ松や時をしるらん

世中しつまりて後、日野大納言家三首に、寄松祝

1426 千世ふへきみとりそいまはあらはるゝとしのさむさにみえし松かえ

右大臣殿にて、藤を

1427 ことしこそ君か春なれかすかやまふもとに匂へ北の藤なみ

新千載集事仰られて後、御子左大納言家三首
哥に、祝

1428 かくてこそ千よもさかへめ立かへりひとかたによる和哥のうらなみ

同心を

1429 しきしまのやまとことのは昔よりつもるは君か千世の数かも

寄神祇祝

1430 やをよろつ国つみ神のかすゝにまもれる千代はわか君のため

近衛殿道一嗣 公御作

竊視世集之輯編可謂和歌之規範彰意／氣於

萬象之中垂風躰於千載之後誠是／此道之

遺美也豈不斯文在茲乎不足嗟嘆／聊吟情

而已

としへぬる和哥のうら人みかけはそ／あつむる玉のかすつもるらん